

明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり

本編

2021
11

ISSN 1340-8917

プラスワンで地域をつくる若手公務員

本誌は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです



1 巻頭エッセー／「人口減少に打ち勝ち、笑顔で暮らせる島根」を目指して 丸山達也（島根県知事）

特集

プラスワンで地域をつくる若手公務員

全国各地で、公務の枠を超えて地域活動や社会貢献活動に取り組む公務員が増え、地域の新たな活力を生み出している。今回は、地域へ飛び出し活躍する若手公務員たちのプラスワンの活動の特集。

- | | | | |
|----|---------|----------------------|--------------|
| 2 | 基調論文 | 多彩な活躍支える条件整備を | 大杉 寛（慶応義塾大学） |
| 6 | 栃木県茂木町 | 一般社団法人を設立して町の財源を生み出す | 爲永崇志 |
| 8 | 福井県越前市 | デジタル技術で地域の課題を楽しく解決 | 仲野弘修 |
| 10 | 和歌山県橋本市 | 好きなことで地域に貢献する喜び | 海堀太郎 |
| 12 | 副基調論文 | 地域づくりは楽しい | 井上貴至（山形市長） |

【特集編では基調論文、全12事例を全て掲載～特集編のみに掲載される事例は以下の通り】

- | | | |
|----------|---------------------------|------|
| ●青森県 | リンゴだけじゃない、青森県は魚だ！ | 林 太治 |
| ●青森県南部町 | 地域での活動が想像力を豊かにする | 古舘真美 |
| ●新潟県胎内市 | しなやかな農山村に | 浮須崇徳 |
| ●長野県大町市 | 信濃大町 Youth サミットを推進 | 北澤美沙 |
| ●兵庫県神戸市 | 職員それぞれのスキルを活かせる職場へ | 村上大貴 |
| ●奈良県生駒市 | 「レンタル何でもする公務員」がつくる1杯のビール | 和田真人 |
| ●島根県 | 島根を「世界の未来」つくる震源地に | 中西咲貴 |
| ●高知県高知市 | 1人の100歩、100人の1歩 | 山本美咲 |
| ●福岡県大刀洗町 | 地域に飛び出した私が選んだ転職先は再び公務員だった | 半田 遥 |

レギュラーレポート

- | | |
|---|--|
| 16 移住・定住・交流推進支援事業 新潟県上越市
千年の暮らし息づくコミュニティの新たな挑戦
神崎 淑 | 24 世界遺産 奄美大島、徳之島、沖縄島北部、西表島
地域の普遍的な価値を保全するために
浪花伸和 |
| 18 地方創生実践塾 岐阜県飛騨市
官民協働による地域資源の活用
岡本 文 | 26 アンテナショップ紹介
吉野杉に蘇芳色が映える Cafe&Barも
古川義富美 |
| 20 2020年度 国内調査報告①
宮城県女川町、東京都大田区、愛知県豊橋市
出歩きたくなるストリートデザインとは | 27 首長の思い
全国各地域とともに成長・発展し、
共存・共栄を推進
武井雅昭（東京都港区長） |
| 22 2020年度 国内調査報告②
千葉県柏市、香川県高松市、愛媛県西条市
産学官連携によるスマートシティの推進 | |

グラビア

- 28 都道府県漫遊 【福井県】
手前みそですが… 【富山県立山町】



秋から冬にかけての早朝、好条件に恵まれれば出現する雲海

墨絵の世界のような「鹿野山九十九谷の雲海」

表紙

（千葉県君津市）

九十九谷展望公園からは、高岩山など上総丘陵が幾重にも連なる山並みの風景を眼下に一望することが出来ます。これら山谷の織り成す景観を総称して九十九谷と呼ばれており、夜明け前から日の出直後と日の入り前の情景は墨絵の世界にも例えられています。

紅葉の時期に見られる緑と紅のコントラストや冬季の雨上がりの早朝、霧の中に浮かび上がる幽玄な景観など、四季折々の表情を楽しむことが出来ます。

この景観は君津市の次世代に伝えたい20世紀遺産および、千葉県の眺望百景にも登録されています。

問い合わせ先 君津市経済振興課

（0439・56・1325）

（写真提供 君津市）

「人口減少に打ち勝ち、 笑顔で暮らせる島根」を目指して

島根県知事 ● 丸山 達也



島根県には、豊かな自然、古き良き歴史、特色ある文化があり、その中で営まれてきたお互いに助け合う温かい地域社会や絆があります。ゆつたりとした時間の中で、自分らしく、仕事も暮らしも大切にしたい生活ができる環境があります。

ここにしかない魅力と豊かな暮らしを大切に、次の若い世代に引き継ぐため、県では、人口減少に打ち勝ち、笑顔で暮らせる島根をつくる「島根創生計画」を令和2年3月に策定しました。

若者が増え、次代を担う子どもたちが増えることで活気にあふれ、県民一人ひとりが愛着と誇りを持って幸せに暮らし続けられる島根を目指し、次の施策を推進しています。

- ① 産業振興を進めて活力を高め、若者の雇用と所得を確保する
- ② 子育て支援や、働きやすい環境づくりを進める
- ③ 中山間地域・離島と都市部の共存・連携による地域づくりを進める
- ④ 産業や生活の基盤として欠かせないインフラ整備を進める
- ⑤ 島根に愛着と誇りを持ち、島根を支える人を増やす

人口減少対策の柱となるのは、子育てしながら働きやすい環境をつくり、島根で子どもを産み育てる年代の方々を増やしていくことです。

島根県は育児をしている女性の有業率が全国で最も高く、令和2年の合計特殊出生率は1・69と全国で2番目に高くなっており、働きながら子育てしやすい環境があります。県では子育てと仕事との両立に力を入れており、4月1日時点での保育所入所の待機児童数は、ほぼゼロ

を継続し、放課後児童クラブの新設・増設や利用時間の延長なども進めています。また、子どもの医療費助成を拡充し、今年度から県内すべての小学6年生までの子どもが医療費負担の軽減を受けられるようになりました。こうした支援策を通じて、子育て世代に、もう一人子どもを産んでみようと思っていただけするような環境づくりをさらに進めていきます。

また、将来を担う若い世代を増やしていくためには、産業の活性化による所得水準の向上や雇用の場を増やす取り組みが重要です。若い世代、特に女性に魅力を感じてもらえるような職場を増やし、働く場や生活がイメージできる情報を届けていく必要があります。県外から島根に戻る若者を増やすため、本人への情報発信だけでなく、親からも島根の良さや島根で暮らすメリットなどを伝えてもらえるよう、今年度からは親世代へのアプローチを強化しています。

さらに、都市圏の若者に向けては、人間らしい温もりのある暮らしができる島根のイメージを発信する「いいけん、島根県」プロモーションに取り組んでいます。「自分のサイズで生きていい」をキャッチフレーズに、ワーク・ライフ・バランスのとれた暮らし、人と人とのつながり、子育て環境の良さといった魅力の発信に加え、「田舎暮らし」だけではなく、都市と自然のバランスのとれた地方都市で暮らすイメージなど幅広い選択肢を提示して、若者の関心や移住先としての検討につなげていきたいと考えています。

コロナ禍で人々の価値観や社会が変化し、地方の良さが再認識されている中、人生の節目、選択の時に選んでもらえる「島根」になるよう、今後とも、人口減少に打ち勝ち、笑顔で暮らせる島根をつくる「島根創生」の取り組みを、総力を挙げて推進していきます。

多彩な活躍支える条件整備を

―地域づくり人財としての若手「プラスワン」公務員―



東京都立大学法学部教授

● 大杉 覚

「プラスワン」と相互承認

近年、地域づくりの現場で、多彩な「顔」を持ち合わせた「プラスワン」公務員の活躍が注目を集めています。

ここで「プラスワン」公務員とは、本務とは別に、社会貢献やコミュニティ活動をはじめとした地域づくりに自発的に従事する公務員を指します。本誌特集に登場する若手職員の皆さんは、さしずめ若手「プラスワン」公務員。その多彩な活躍ぶりは地域にとっての希望でしょう。

希望であるならば、もっと増えたほうがいい。より一層明るく輝き続けさせたい。そこで、「プラスワン」公務員について掘り下げて考えてみましょう。

結論を先取りすれば、相互承認がキーワードです。「プラスワン」とは、その職員本人にとって

は自発的な取り組みであるわけですが、それだけではありません。上司・同僚など役所内はもちろん、地域の人々にも理解、納得（少なくとも許容）されなければなりません。そのように広く受け入れられていることを職員本人が自覚したうえで取り組む必要があります。このような意味で、「プラスワン」は、一種の相互承認によって成立するものだと考えられます。

言い換えますと、「プラスワン」公務員の相互承認それ自体が地域づくりのプロセス（の一部）であり、かつ、地域づくりのアウトカム（の一つ）だということです。

「プラスワン」という画期的な視点

「プラスワン」が相互承認のうえに成り立つということとは、地域に暮らす以上、その一員として従事するのは当たり前だとみなされるような伝統

筆者プロフィール

大杉 覚氏

（おおすぎ・さとる）

東京大学大学院修了（博士（学術））。成城大学法学部専任講師、東京都立大学法学部助教授などを経て、現職。（一財）地域活性化センター全国地域リーダー養成塾主任講師（15年目）、自治大学校講師、世田谷区参与（せたがや自治政策研究所所長）をはじめ、国・自治体の審議会等委員など歴任。専門は、行政学、地方自治論。近著に、『コミュニティ自治の未来図』（ぎょうせい）、『これからの地方自治の教科書』（第一法規、共著）

的なコミュニティの慣習に基づく活動とは異なることを意味します。地域のしきたりで草刈りや川さらい、ゴミ当番をこなすことは、暮らしを営むうえで必要不可欠です。けれども、「プラスワン」とはいえませんが、また、役人だから当然でしよう、とか、住民に協力を求めているんだから、職員が率先してやらないでどうする、などと半ば強要される（『巻き込まれる』）のも、ここでの相互承認とは異なります。自発的でないだけではなく、公務と混同されており「プラスワン」たりえないからです。

逆に、どんなにメディアで取り上げられ、スーパー公務員^① などともはやされても、公務とはケジメをつけたうえで、地域に根ざした活動をしているのだとの周囲の理解がないかぎりには、ここでのいう真正の「プラスワン」公務員ではありません。

自治体職員が地域に真摯に向きあえば、本務の枠に収まりきらないことはいくらでもあります。しびふながら、時間外手当や代休の代償措置があるからいいだろうとお付き合ひするのが一つの選択肢。どっぷりと浸かっているうちにその面白さにのめり込んで、本務だかどうかわからなくなっているというのも一つの選択肢。就業時間外ですから、職務の矩を超えていますから、ときっぱり断ち切ってしまうのもまた一つの選択肢。

「プラスワン」公務員の「発見」は、ここに新たなもう一つの選択肢を付け加えたことに意義があります。より正確には、以前からあったかもしれないがそれを「見える化」したのだともいえません。さらにいえば、「プラスワン」公務員という

カテゴリーを新たに打ち建て、これからの公務員についてポジティブに論じるという、画期的なプロジェクトであることを強調すべきでしょう。

「プラスワン」成立のためには

5、6年ほどまえになりますが、ある自治体での若手世代向けの職員研修で、職員はいかに地域に関わるべきかをテーマにディスカッションしていたときのことです。「自治体職員であることですでに地域に貢献しているのだから、職務外でボランティアに地域に関わる必要はありません。民間の方がすればいいことです」ときっぱり述べた職員がいて仰天しました。仮にこの職員をXさんとしましょう。みなさん、Xさんの発言をどう考えるでしょうか。

Xさんは、自らの職務に誇りを持ち、責任感も強く、本務では積極的に地域にコミットしてきた方です。掛け値なく優秀な職員だと、筆者は高く評価しています。なるほど、Xさんが「プラスワン」という発想を持ちあわせていなかったのは発言から明らかです。また、Xさんの公務の捉え方に疑問がないわけではありません。と同時に、そうでなくても業務量が増え、職員定数が減らされ汲々とせざるをえないなかで、職務外の活動にまでエネルギーを振り分けている余裕はないし、それぐらいならば本務に全力を注ぎたい、こう考えていたことは間違いありません。さらに、これは憶測ですが、Xさんはちょうど家庭を築き、子育て期にさしかかろうかという年代でしたから、実際、生活面でも物理的に時間の余裕はなかったか

もしれません。

Xさんのエピソードからの示唆はといえば、仮にXさんが「プラスワン」公務員になるには、「プラスワン」という発想自体をまず知り、理解し、受容することが前提です。ただ、それだけでは不十分です。加えて、その発想を現実に成り立たせるだけの環境整備も不可欠だということです。Xさんは実在の人物ですが、自治体職員の多数派代表であり、そして、おそらくこの文章を読んでいるあなた自身でもあるのではないのでしょうか。

自治体を取り組むべき環境整備

特に若手職員には「プラスワン」公務員として希望の輝きを発して欲しいものです。そこで、自治体に望みたい、制度面、実践面の条件整備について指摘しておきましょう。

第1に、地域づくり活動を兼業・副業として従事する際の許可制度を明確化することを通じて、地域づくりへの参加を支援することです。地方公務員法では、地方公務員の営利企業等従事許可制度（第38条）が定められていますが、その運用方針が明確でなかったり、実質的に禁止に近い運用をしたりする自治体が少なくありません。そのため、公務外の「プラスワン」の活動を兼業・副業として従事するインセンティブに乏しく、結果的に地域づくり活動への参加意欲が削がれてしまう面は否めません。公務外にはみ出すことを恐れ、公務そのものを萎縮して捉えがちになる一因でもあるでしょう。

神戸市の地域貢献応援制度、生駒市（奈良県）

の副業応援制度などのように、規定を整備しなおし、職員の地域での活躍の機会を支援できる制度に拡充する自治体も現れてきました。以前調査で神戸市や生駒市の担当者にお話を伺ったところでは、明確に制度を打ち出せば、兼業・副業そのものが禁じられていると思い込んでいた自治体職員の意識にも確実に変化が生じてきたとのこと。(注1)

さらには、自治体が明確な姿勢を示せば、地域の人々もガチガチに規則に縛られた公務員像という思い込みから解き放たれる効用もあります。場合によっては公務員以上に厳しい兼業規制を就業規則などで定めた民間企業もその対応を改め、それがきっかけで「プラスワン」企業人の増加につながるかもしれません。公務員も企業人も、地域において「組織内フリーランス」がごとく活躍する機会・場を少しでも持てるようになれば、地域の厚みは一層増すのではないでしょうか。(注2)

第2に、第1の点とも密接に関係しますが、いわゆるワーク・ライフ・バランスの実現です。公務などワーク外を充実させ、「プラスワン」への動機づけやその自発的な実践に乗り出すためには、物理的な時間が確保されることは最低限の要請です。連日深夜残業、休日出勤続きでは「プラスワン」はおろか、健康な日常生活を送ることすら危うい。

例えば、上記の副業支援制度をいち早く導入した生駒市の小紫雅史市長は、公務員自身が仕事だけではなく人生全般を視野に入れ、仕事(ワーク)、家庭(ライフ)、地域活動(コミュニティ)、自己実現(セルフ)の4つの要素を意識し、効果的に

組み合わせながら人生を豊かに暮らすことが大事だと主張しています。(注3)

「プラスワン」がライフなのかコミュニティなのかセルフなのか、それとももう一つのワーク(副業)なのか、人それぞれですし、同じ人でもライフステージに応じた組み合わせ方がありうるということです。また、「プラスワン」であるもう一つのワークに比重を置くならば、短時間勤務や非常勤職という選択肢も当然視野に入るはず。「プラスワン」公務員とは、これら選択肢の一つだという柔軟な発想が必要でしょう。

第3に、「プラスワン」公務員の位置づけを考える「場」の確保を強くお勧めします。初任者研修など研修機会を利用し、上述の点などを含めた体系的な知識を提供・周知することはもちろん、単なる座学としてだけではなく、キャリア・デザイン研修の一環として職員間で「プラスワン」公務員についてグループ・ディスカッションしてはどうでしょう。

すでに身近に「プラスワン」公務員がいたり、職務上行動をともしたりしているようであれば、自ずと情報共有されるかもしれません。それでも意識的に「場」を確保することは重要です。そうした「場」で、経験豊富な「プラスワン」公務員に自らのキャリアを語ってもらい、その話を受けて参加者が意見交換することができれば、同じ職員同士ですので、より理解が促進され効果的です。職員同士で「プラスワン」に取り組むための自主的なルールづくりなどを議論してみるのもいいでしょう。自主的な勉強会で「場」を設けたという要望に応える支援体制を用意することも

是非考えて欲しいものです。

一歩踏み出すのにためらっている職員は多くいます。実は身近に「プラスワン」の「受け皿」がふんだんにあるのに気づかれていなかったりもします。こうした実情を踏まえた取り組みが望まれるのです。

『プラスワン』と4つの行動特性

さて、どのような「プラスワン」公務員が望まれるかは気になりますが、一義的に決めつけるわけにはいきません。多様な視角から論じられるべきテーマですが、ここでは地域づくり人財という論点に絞って考えてみましょう。

地域づくり人財は、表で示されるような4つの行動特性のブレンドでその特徴が決まると筆者は考えています。「空間(場)」と「時間(プロセス)」とそれぞれについて、「その場で・その時に」＝withinを重視するのか、「場・時を超えて」＝beyondを重視するのかで、「現場実践する人財」「伴走する人財」「越境する人財」「未来を拓く人財」という4つの行動特性が抽出されます。

これまで公務員は、いずれかといえば、「現場実践する人財」や「伴走する人財」といった行動特性が重視され、期待される職員像として求められてきました。最近では、「越境する人財」「未来を拓く人財」であることが要請されるようになってきたものの、苦手意識を持つ自治体職員も多いでしょうし、実際そのように振る舞おうとしても公務の制約で思うようにいかない現実の壁にぶつかりがち。だとすれば「プラスワン」の活動では、

「越境する人財」ぶり、「未来を拓く人財」ぶりを
思う存分發揮してみたい手はないはずです。

表 地域づくり人財の4つの行動特性

	空間（場）	時間（プロセス）
～とともになかへ within	現場実践する人財	伴走する人財
～を乗り越えて beyond	越境する人財	未来を拓く人財

行政が実現すべき価値には、効率性・経済性を重視するシグマ価値、誠実さ・公平さを旨とするシータ価値、安全性やレジリエンスに関わるラムダ価値といった3つの競合する価値群があるとされます。（注4）公務員が比較的に得意とする（はずの）「現場実践する人財」や「伴走する人財」として行動する場合であっても、昨今の厳しい財政状況のもとでは効率性・経済性といったシグマ価値が他の価値に優先されがちだったりします。仮に価値観としておおむね合致していても具体的な施策・事業では違和感を覚えることもあるでしょう。だとすれば公務では果たし得ない、実現したい価値や具体的なプロジェクトを、「プラスワン」の活動を通じて実現に努めるというバランスのとり方も考えられます。さらには、「プラスワン」と公務の双方に携わることで、シナジー効果が期待できるメリットも見逃せません。

若手「プラスワン」公務員への エール

地域づくりとは、それぞれの地域で醸成されてきた、根っこにある地域価値を再確認しつつ、そこを起点にして、これからの未来図（未来の地域価値を実現させた姿）を地域で思い描き、その実現を試みようとする、価値実現のプロセスだといえます。それだけに、未来が現場である若者世代の活躍が「出番」として認知・承認されることはとても大切です。「プラスワン」公務員とは、そうした地域における出番づくりを意識させる有力な手法なのです。

前述の小紫市長は、管理職に対して、本業をち

ゃんとしてから副業を語れと言わないようにして欲しいと伝えているそうです。筆者も、「プラスワン」などというまえに本務できちんと一人前になるのが先決だなどと揶揄すべきではないと考えます。

なぜなら、「人財」とは、ただのリソース（資源）ではなく、ギフト（才能）を持つ存在だからです。こうした発想に立てば、人それぞれの持つ能力が發揮されるべき機会や場、その活躍の広がり具合などは、多彩に想定されるのが好ましいことがわかります。相互承認さえ踏まえていれば、本務は地味でも「プラスワン」で燦然と輝いていいのです。

実践のなかでも、現実には安易に妥協することなく、「プラスワン」公務員を一人でも多くの若手職員に極めて欲しいものです。

後注

（注1）一般財団法人自治研修協会『地域創生の時代における地域コミュニティの担い手育成等に関する研究会報告書（平成30年度）』2019年、第5章1、2参照。

（注2）『組織内フリーランス』については、大杉寛『コミュニティ自治の未来図』（ぎょうせい、2021年）、第4章参照。

（注3）小紫雅史『地方公務員の新しいキャリアデザイン』（実務教育出版、2021年）。

（注4）Christopher Hood, "A public management for all seasons?", Public Administration, Vol. 69, Spring 1991, pp.10f.

一般社団法人を設立して

町の財源を生み出す

— 20年後の子どもたちに住みよい環境を創るため —



茂木町役場建設課管理係主査
一般社団法人 Social Up Motegi 代表理事

・ 爲永 崇志

茂木町で生まれ育った子どもたちが、地元に着を感じ、誇りに思えるようなまちづくりを進めていきたい！ そんな思いから、2020年4月に一般社団法人 Social Up Motegi を設立しました。

Social Up Motegi は、こわゆる地域商社の活動形態で、茂木町にある山林、農畜産物などの地域資源のブランド化をプロデュース、地域内外に販売しています。

間伐材活用の積み木の販路拡大

茂木町は土地面積の65%が山林で、木材が豊富な土地です。町内では、森林を守るために木を伐採する「間伐」が行われていますが、間伐した木が捨て置かれることや、安い値で市場に出ていることも……。間伐材をうまく活用できないだろうか。付加価値を付けて商品化できないか。

そんな考えを巡らせている時に、既に商品化さ

れていた「もつくいっく」という積み木の商品が目にとまりました。「木育」という言葉が由来の「もつくいっく」は、ヒノキの自然な香りが特徴的で、茂木町で伝統の技を受け継ぐ木工職人が制作した商品です。私たちは「もつくいっく」を多くの手に取ってもらえるように、パッケージをリニューアル。さらに「道の駅もてぎ」「自社Webサイト」、ネットショップ「BASE」など、さまざまな場所で購入できるように販路拡大を行っています。

その他にも、間伐材を使用した幼児用の椅子「もつくいっく」のプロデュース、販売、地元事業者がプロデュースした「ログトーチ」などの販売も手がけています。

放牧黒毛和牛のブランドディング

茂木町で畜産農家を営む「瀬尾ファーム」の黒

リーダーシップにたけた生粋の茂木人

一般社団法人 Social Up Motegi 理事
栃木県茂木町役場総務課庶務係 主査 東海林 帆

爲永代表とは2019年から始まった地方創生勉強会でともに学びました。当時、爲永代表は企画課職員で勉強会を担当し、内容や日程の調整、勉強会のファシリテーションをしていました。爲永代表は生まれも育ちも茂木町で生粋の茂木人。職員からの信頼が厚く、リーダーシップにたけ、何事にも臆することのない人柄で、社団法人を立ち上げる際には、代表理事の適任者でありました。地域商社事業は役場業務外の活動で時間に制約があるなど前途多難ですが、爲永代表のリーダーシップのもと、社員・理事一同、助け合って頑張っていきたいです。

毛和牛をブランド化するために、クラウドファンディングを実施しました。

瀬尾ファームは、海上自衛隊を早期退職した瀬尾さんが夫婦で始めた牧場です。耕作放棄地に牛を放牧し、計8・1ヘクタール（東京ドーム1・5個分）の土地を再生へと導きました。

クラウドファンディングでは、「瀬尾ファーム」で育った牛を東京の市場には出荷せず、栃木県内で取引先を見つけて商品化することに挑戦。目標金額を集めることに成功しました。

「もてぎ放牧黒毛和牛」のブランド化に向けた



Social Up Motegi

地域資源のブランディングロゴマーク



設立総会で議長を務める為永代表

PRと言いますか、第一歩を踏み出すためのプロデュースだったと考えています。

◆ ◆ ◆ メンバー全員が公務員の団体誕生

Social Up Motegiを設立したきっかけは、地方創生の勉強会に参加したときでした。町役場の若手・中堅職員が有志で集まり、「茂木町で何ができるのか」と、考える機会がありました。

参加者と何度も考え、意見を出し合う中で、「まちのために何かやろう！」という想いが、少しずつ強くなっていきまして……。

もちろん町役場の職員として活動することは可能でしたが、より自分たちで主体的に活動できる環境を整えたい気持ちから、勉強会の参加者と共にSocial Up Motegiを設立。

こうして、メンバー全員が公務員の団体が誕生しました。

Social Up Motegiは、「20年後の子どもたちにとって住みよいまち、大学や仕事で地元を離れても茂木町を好きでいてくれ、誇りに思ってくれるようなまちをつくっていかう」と、活動しています。

漠然としていますが、私は「かっこいい田舎」をイメージしています。

例えば、里山でも草が伸び放題だと格好がつかないと思うので、ある程度整備してきれいにしたり、アウトドアで活用したり。「田舎だから嫌だな」ではなく、「頑張ってるから好きだよ」と思ってもらえるような、そんなイメージです。イメージは法人の公式インスタグラムをみてください！そして

で、かっこいい茂木町のイメージをタグ付けして一緒に盛り上げてください(笑)。

2021年から茂木町で「もてぎの森林からの贈り物事業」が始まりました。これは、茂木町で生まれた子どもたちに、茂木町の豊富な森林資源で作られた椅子「もつくいつす」と積み木「もつくいつく」をプレゼントする取り組みで、木が好きな人を育てる「木育」の一環です。また、木の香りやさわり心地を親とともに体験することで「木」のファンを増やし、地元の木工業者の活性化につなげていくことも視野にいられています。

この町を好きになるきっかけを作ろうと、私たちもアイデアを出し、商品の販売やPR活動に関わっています。少しずつではありますが、「かっこいい田舎」をイメージしながら活動を続けています。

◆ ◆ ◆ 子どもたちが誇りに思いつまちに

子どもたちのために住みよいまちを創ることが、私たちの目的です。

子どもたちが茂木町に残らずとも、茂木町を好きでいてくれて、自分のふるさとであると認識し、誇りに思ってもらえるようにする。

そのために、地域資源を活用した商品を開発・販売し、外貨を稼ぎ、まちの財源を獲得することで茂木町が茂木町として持続することができるよう活動していきたいと考えています。

今後も自由な発想で同じ志や想いを持つ仲間と、茂木町の子どもたちや、町のためになることを話し合い、実行に移していきます。

デジタル技術で地域の課題を楽しく解決 —子どもたちに好奇心と想像力を—



越前市産業環境部産業政策課主幹
越前市ぶらぶらぼ所長

・仲野 弘修

プログラミング花火

「ボールをなげたら、はなびがあがった!」「ふしぎ! まほうみたい!」

子どもたちが壁に向かってボールを投げると、壁一面にたくさんの花火が……。次々に打ち上がる色とりどりの花火に「たのしい!」「きれい!」と子どもたちの歓声が上がります。これはデジタル技術を活用した「プログラミング花火」の様子です。投げたボールをセンサーが感知し、プロジェクターが壁に花火を映し出すという仕組みです。私たち「越前市ぶらぶらぼ」は、この取り組みを地元の幼稚園などで実施し、昨年は1年間で14カ所、約900人が体験しました。

きっかけは市民の疑問の声

「このゴミ、何ゴミですか?」「ゴミの捨てる日がいっただったか教えて」

今から8年前の2013年のこと、私は行政に

寄せられるこうした声に直接答えることができないかと考えていました。目に留まったのは、新聞などで紹介されていた「オープンデータ」。そこでプログラミングの勉強を開始し、本で調べたりインターネットで調べたりしながら、ゴミ分別アプリ「越前市ゴミチェッカー」の原型を完成させました。周りの人たちに実際に使ってもらったりSNSで感想を聞いたりすると、「レイアウトをこう変えてみたら」「このロゴを使つて」などの提案や協力をしてくれるプログラマーやデザイナーの人が出てきました。私たち越前市ぶらぶらぼは、「デジタル技術で地域の課題を楽しく解決する」ことを目指す市民団体で、市職員や企業SEなどが集まり、2013年に結成しました。

コロナで花火大会中止「さみしい」

新型コロナの影響で暮らしは一変しました。外遊びが減ったり、いろいろなイベントが中止にな

きらめく花火のものは、 優しさそのもの

日本ボルガラー協会 ボルガチョフ
越前市役所 市民福祉部 社会福祉課 主査 波多野 翼

越前市役所は、仲野さんをはじめ多くの若手職員が自分たちの特技や個性を活かしてまちづくり活動を行っています。そして、仲野さんの活動は、毎回子どもたちの歓喜の声と笑顔であふれています。

「コロナ禍で花火が見られない子どもたちに花火を見せてあげたい」という優しい思いをプログラミングで実現させた仲野さん。子どもたちの笑顔は、その優しさを子どもたちが感じ取った証拠だと私は思っています。これからもその優しさとプログラミングでたくさんの人の笑顔を作っていく仲野さんらしい活動を楽しみにしています。

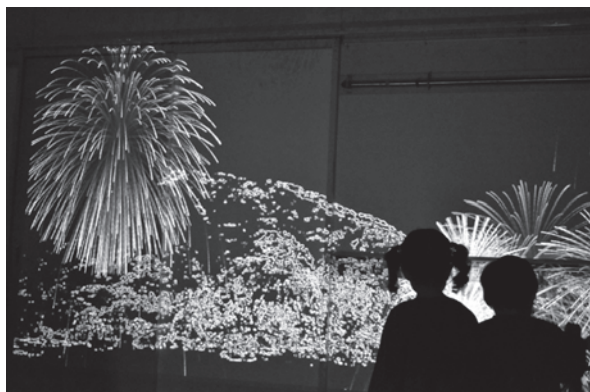
ここがスゴイ!

つたりと、私の娘たちも自宅で過ごす時間が増えました。特に花火大会の中止を娘たちはさみしがっていました。そこで私は、花火気分が味わえるプログラムの製作に取りかかりました。完成したものを娘たちにやってもらったら大好評。ならば、より多くの子どもたちに楽しんでもらえればと、地元の幼稚園の協力を得てプログラミング花火大会を開くことになりました。

この幼稚園での様子がメディアに取り上げられました。すると、「コロナで園外での遊びや活動が制限されて……」「子どもたちに新しい楽し



ゴミチェッカーのWebサイト



ボールを投げて「ドーン！」子ども園でのプログラミング花火の様子



オープンデータユースケースコンテストで優秀アプローチ賞を受賞

このようにたくさんの人とつながり、子どもたちと関わっていることは、私の大きな喜びです。

今後もデジタル技術を活用し、すべての子どもたちが「たのしい」「ふしぎ」「へえー！」「びっくりぎょうてん！」と感動を持って帰れる場を作っていきたいと考えています。そしてこの経験が子どもたちの好奇心や想像力を育むことにつながれば嬉しいです。

たくさんの人のアイデアで進化

「今日はみんながいつも使っているこの部屋を、魔法の部屋にしました！」「この魔法のボールで花火を打ち上げたいと思います！」子どもたちがワクワクするイベントを園の先生たちと作り上げます。「たのしい！」「なんで？」「がんばれー！」と夢中になってボールを投げる子、目を輝かせてじっと見つめる子、友達を応援する子など、子どもたちは思い思いに楽しんでくれます。保護者からも「ボールを投げるまねをして、楽しそうに話をしてくれました」とうれしい声を聞くことができました。

さらにたくさんの人のアイデアでプログラミング花火は進化していきました。

例えば、地元のかこさとしふるさと絵本館「研」では、かこさとしさんの絵本の場面を追体

験できるプログラミング花火を行いました。絵本の世界をデジタル技術を使って表現したことに「びっくりぎょうてん！」「絵本の中にいる感じがして楽しかった！」と子どもたちは大喜びしていました。

また、ある特別支援学校から「自分の体を自分の意志でなかなか動かせない子どもたちに、何か光のコンテンツを作ってもらえませんか」と相談がありました。製作に3カ月かかりましたが、自らのちょっとした動きに反応して、様々な変化を楽しむことができるデジタルアートが完成しました。障がいのある子どもたちは、壁に向かって手を振ったり、床に寝転がったりして映し出される花火や花を目で追ったり、映像に合わせて声を上げたりしていました。先生たちからは「体験の幅が広がりました。子どもたちは何かを感じ取ったようです」との声を聞くことができました。私は

こうした「思ってもみない」ことが子どもたちの間に起こっていることに、驚きとうれしさを感じました。

すべての子どもが感動を持って帰る

また別の特別支援学校で実施した時のことです。広いホールを暗くして準備をしていると、「何してるの？」と子どもたちが不思議そうに寄ってきます。「いいことがあるよ」と伝えると笑顔になって教室に戻っていきます。よほど楽しみなのか、何度も行ったり来たり。大盛り上がりした後、先生からは「集団活動に参加しにくい子、見通しの持てないことに不安を持つ子などさまざまな中で、どの子も一人残らず楽しそうにボールを投げる姿を見ることができたことが何よりも嬉しかったです」とお礼の言葉をもらいました。

好きなことで地域に貢献する喜び —公務員ロックバンドで地域活性化—



橋本市総務部税務課主査

・海堀 太郎

みなさま、はじめまして！ 橋本市総務部税務課の海堀太郎です。今回の「地域づくり」の特集は「プラスワンで地域をつくる若手公務員」がテーマ。ということで、この紙面をお借りして私もメンバーとして参加している、公務員で結成された音楽グループ、橋本市を中心に活動する「地域活性化ロックンロールバンド ザ★太郎さんズ」を結成するに至った経緯とそれに伴って気づいた「好きなことで地域に貢献する喜び」について書かせていただきます。その前に、まずは私の自己紹介から。

大震災機にIT企業から公務員へ

私が橋本市役所に入庁して10年目となりました。介護保険、市街地再開発、ふるさと納税、ブランド推進、シティセールスに携わり、現在は税務課で市民税を担当しています。もともと民間のIT企業でシステムエンジニア・プログラマーとしてアパレル企業のシステム開発に関わっていました。

たが、2011年3月11日に発生した東日本大震災をきっかけに公務員を目指すようになりました。東日本大震災で命を懸けて避難を呼びかけた女性をはじめ、全国から支援のために駆けつけている人々が公務員であるという報道を見て「いざという時に人々に寄り添えるのは公務員」と考え、翌年、勤めていたIT企業を退職し、地元の橋本市役所に転職しました。

日に日に強まる地域への思い

民間企業に勤めている時分には全く意識はできていなかったのですが、結婚して、子どもが生まれて、社会との接点が増えるにつれて行政の支えを肌で感じるようになりました。また、公務員に転職してからは地元のお祭りやイベント、自治会、PTAなどのコミュニティに積極的に参加するようになり、地域のために尽力されている人々と関わるにつれて「育ててもらった人々と地域に恩返ししたい、次の世代につなげなければ」

ここがスゴイ！

全力で取り組む強い意志

橋本市健康福祉部福祉課 中村 峻

海堀太郎君とバンドを結成して、はや8年目。私は共通の趣味で遊んでいるつもりでしたが、彼は最初から現在の活動を見込んでいたんだと、今になって思っています。

彼には先を見通す力があり、また遊びの中からでも、仕事に生かせるものを見出す力があります。これは「仕事」や「遊び」などの垣根を持たず、自身の興味に全力で取り組める強い意志によるものだと思います。

今後も彼は地域のためにその能力を生かしてってくれると思います。同僚として、また良きライバルとして期待しています。

全国で（たぶん）唯一の 公務員ロックバンド

という地域への思いが日に日に強くなりました。

橋本市の公務員として地元の橋本市民のために働く、大好きな音楽を通じて地域に貢献したい、楽しく地域のことを知っていただきたい、そうした思いの一つの答えが、2013年、地域活性化をコンセプトに橋本市役所の公務員で結成した「地域活性化ロックンロールバンド」です。

まずは地域をテーマにした楽曲の制作にとりかかりました。私達が勤める橋本市は世界遺産である高野山の隣町。もともと宿場町であり交通の要



公務員ロックバンドのメンバー全員



満員の聴衆を前に屋内ライブ

所という歴史があるのですが、現在ではどちらかというと通り過ぎられがち。そんな背伸びしない等身大の状況を歌った「おーい橋本」をはじめとしたさまざまな楽曲を、職場の同僚でありバンドメンバー、そして私のズッ友（ずつと友達）でもある中村峻さんが作ってくれました。

それらを引っさげ、地域のさまざまな場所でライブを行いました。ライブハウス、駅前、歩行者天国、公民館、古民家などなど。ライブをするとその地域に住む方々に声をかけていただけるのですが、公務員として庁舎で働いていたら出会えないような方々や課題に向き合う機会に恵まれ、バンド活動で得た経験が仕事にも生きてくるように

なり、ふるさと納税の返礼品の発掘やPR動画の制作につながりました。この部分についてはもっと書きたいのですが、それよりも今回はみなさまに伝えたいことがあるのです。

◆◆◆ 地域活性化とは

みなさまは「地域活性化」という言葉をどのように捉えていますか？ 私は公務員になってからずっとこの言葉の意味を考えています。どのような状態になれば地域活性化はゴールと言えるのか。まちの豊かさの指標としてしばしば挙げられる、たとえば人口、所得、経済的効果。それらがたくさんあれば豊かなのか、幸せなのか、それらが少ないま

ちは不幸せなのか。もちろん答えは地域の数だけあるのですが、地域でバンド活動が続ける中で、地域のことを歌うにつれて、地域に住む方々と触れ合うにつれて、その輪郭が徐々に見えてきたように感じました。

◆◆◆ 地域活性化に「ゴール」はない

一見、豊かさが実ったように感じる現代社会なのですが、人々が生きていく以上、それに伴う課題は果てまでついてきます。「どのような状態になれば地域活性化はゴールなのか」と前段で書いたのですが、地域に寄り添いながらバンド活動を続けていく中で感じたことは、「ゴールに向かう以外の答えがあるのかも」ということでした。人々の有機的な集まりである地域は、人々以上に関係性と物語を積み重ね、長い年月を生きてきました。これからも地域は遠い未来まで生き続けます。その地域に対して私達ができることは、常に課題と向き合い、次の世代にバトンタッチすることなのです。長い時間が必要となります。だからこそ、自分の好きなことと共に向き合うのです。自分のやりたいこと、自分の好きなこと、周りから求められていることの交わる場所に、きっと素敵な体験と仲間が待っています。

◆◆◆ やっちゃいましょう、好きなこと

私の場合はたまたま音楽が好きだっただけで、何でもいいと思います。公務以外ですのですから、好きなことやっちゃいましょう。好きなことに夢中になっているとき。そのときの自分が一番自然体ではないでしょうか。自然体で過ごす日常のふとした瞬間に感じるワクワク、これが地域活性化につながるかもしれないなんて最高じゃないですか。

地域づくりは楽しい

「やりたい」を大切に――

山形市副市長 ● 井上 貴至

どんな分野でも「やりたい」ことは、「やらされている」ことと比べて、大きな力を発揮します。「やりたい」ことだからこそ、没頭して長く続けることができます。そして、「やりたい」という強い気持ちが仲間を動かします。

読者の皆様にとって「やりたい」ことは何でしょうか？

私が高校から続ける柔道では、「やりたい」かどうかを見極める簡単な方法があります。投げられたときに「悔しい」と思うか、「もう、いいか」と思うかの違いです。最初は誰もが初心者ですから必ず投げられますが、その時に「悔しい」「次は投げたい」と思うからこそ技を磨き、体を鍛えることができます。「もう、いいか」と思う人には、成長はありません。

柔道では、毎年4月28日に東京の講道館で高段者大会が開催され、全国から猛者が集います。60歳、70歳は珍しくなく、80歳を過ぎた方も参加されます。数年前ですが、80歳を過ぎた方が試合に

負けた後、「悔しい」といつて、仰向けになって天井を見ながら泣いている姿を見て、感動したことがあります。

「やりたい」「悔しい」という気持ちに年齢は一切関係ありません。ぜひ皆様もどんな分野でも「やりたい」を見つけて、貫いてほしいです。

そして、「やりたい」ことが仕事にかかわることならば、これほどありがたいことはないと思います。ともすれば家族や友人と過ごす時間よりも長く仕事にかかわるわけですから。

一方で、「やりたくない」ことは、無理をしなければならないありません。無理をしても、つらいばかりか、成果も出ません。世界には多種多様な仕事や遊び、暮らし方があるわけですから、限られた人生の時間を、自分に合った「やりたい」ことに注力する方が有意義です。

地方公務員の皆様には、「地域を良くしたい」という強い気持ちを持つてほしいです。

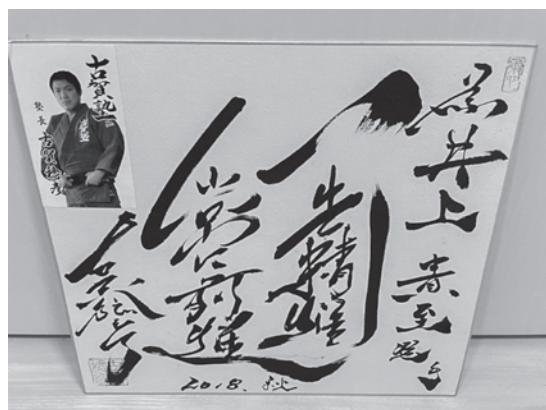
筆者プロフィール

井上 貴至氏
(いのうえ・たかし)

1985年大阪生まれ。2008年総務省入省。15年4月から自ら提案した地方創生人材支援制度の1号で鹿児島県長島町に赴任。7月から副町長（29歳は史上最年少）。17年4月からは愛媛県市町振興課長。内閣府地方創生推進事務局を経て21年7月から現職。週末は地域の隠れたヒーローを訪ね歩く。座右の銘は「ミツバチが花粉を運ぶように全国の人をつなげたい」。共著に「ソーシャルパワーの時代」（産学社）。

「やりたくないこと」でなければ
何でもやってみる

ところで、「やりたい」ことだけやることと、「やりたくない」ことでなければ何でもやってみる、というのは全然違います。生まれたときから「やりたい」ことが明確な人はいないでしょうし、何でもやってみる中で本当に「やりたい」ことが明確になってきます。地方公務員の仕事は、相当に幅広く、どの仕事も地方自治体として欠かさない業務なので、職員の希望をすべてかなえることはおよそ不可能であり、「やりたい」仕事とは異なる分野に配属されることも珍しくありません。しかし、「やりたくない」ことでなければ何でも



古賀稔彦先生サイン

やってみることで、気づきや学びが得られ、新たな「やりたい」と出会うことができます。

「やりたくない」ことについては、目線を変えることも有効です。上司から「やらされている」ことの中にも、少しは自分が「やりたい」ことを入れていると良いかもしれません。住めば都、人間至る処青山有りです。

現場を旅する

私にとって、地域づくりは一番「やりたい」ことです。人とお会いして、町に出るのが大好きです。総務省入省以来、新型コロナウイルス感染症が流行するまでは、毎週末私費で全国を旅して、出会った人と事例をつなげ新しい花を咲かせる「地域のミツバチ」活動を続けてきました。

そのきっかけは、大学2年生の時に、たまたまクラスメイトから誘われたゼミです。最初の授業

で、「君ら東大生は何も知らない。とにかく現場に行きなさい」と言われたことが今も鮮明に記憶に残っています。仲間たちと、沖縄の防空壕や米軍基地、あるいはアジアの研修生を受け入れた農場などで、それぞれの専門家からお話を伺ったことがとても楽しかったです。

社会人になった今も、ゼミの仲間たちとはさまざまなプロジェクトを進めています。

旅は、特別です。他の多くのものは、お金をかければかけるほど時間が短くなりますが、旅はお金をかければかけるほど時間が長くなります。普段はなかなか一緒に話せない人ともゆっくり話すことができます。

最近では、スタディツアーやボランティアツアーなどもありますので、まず一度参加してみたらどうでしょうか。

このようなツアーの参加者には、さまざまな地域のイベントや社会問題に感度が高い人もいることでしょう。そうした人に誘われたら、「やりたくない」ことでなければ何でもやってみる、の精神で一度飛び込んでみましょう。案ずるより産むが易しです。きっと世界が広がると思います。

一対二で向き合う

一方で、深く学ぶためには、一対二で向き合うことも大切です。私自身振り返って良かったのは、本を読んで、あるいは講演を聞いて面白かった人や、仲間から紹介された方に、一人で、週末に私費で、訪ねたことです。

一人で向き合うためには、予習が欠かせません。

お会いする方が、何を大切にしているのか、なぜこのようなことをされるのか、常に考えて臨むようにしています。また、週末に私費で伺うことは、相手に本気度が伝わります。地域で活躍する人はそのホームグラウンドでこそ輝く。現場でじっくりとお話を伺い、関係性を構築することができます。

他者に伝える

予習とともに、復習も大切です。最も良い復習は、他者に伝えることです。伝えることで自分自身の理解度が高まるとともに、仲間を集めることができます。私の場合は、実名で、ブログ「地域づくりは楽しい」を10年以上書いています。

かつて、経済産業省の職員が、「高齢者は早く死ぬ」と書いて炎上、停職処分になった事例もあるので、若手公務員が実名でブログを書くことはリスクではないか、と言われることもあります。

しかし、実名か匿名かの区分に関わらず、社会人として、反社会的・反道徳的なことや、職務上知り得た秘密について発信してはいけないことは当然のことであり、逆にそれを守っていれば、そういうリスクを過度に恐れる必要はないと考えています。むしろ、実名でブログを続けることは、リスクをはるかに上回るメリットがあります。

○分析する、考えをまとめる

視察して、「ああよかったな」では、すぐに忘れてしまいます。徳島県神山町は、サテライトオフィスがあるから良かった、というレベルでは、ほとんど何の意味もありません。何が良かったのか、

なぜできたのか、どういう過程だったのか……自分なりに掘り下げて考えることが不可欠です。

○分かりやすく伝える

考えをまとめるだけなら、「日記」でもいいかもしれませんが。でも、筋道や順番、キーワードなどを考えて他者に分かりやすく伝えようとすることで、より考えが深まり、整理されます。

○名刺代わりになる

分かりやすく伝えるだけならば、「TwitterやFacebookでも代用可能かもしれません。」

しかし、フローとして流れる「TwitterやFacebookよりも、ストックとしてのブログには

	身につく旅	身につかない旅
費用	私費	公費
人数	1人又は少人数	大人数
予習・復習	徹底	しない
行先	自分で決める	人任せ

身に付く旅、身に付かない旅

大きな効果があります。積み重ねれば、自分の名刺の代わりになり、信用が生まれます。

○新しい情報や

仲間が得られる情報を発信して、活動内容を理解して下さる人が増えてくると、さまざまな方が声をかけてくれます。私の場合、ブログ

を続けることにより、地域づくりの分野以外の方々も、井上は地域に詳しいというイメージを持つてくださり、ベンチャー企業の地域における実装などさまざまな相談をいただくようになりました。新しい情報や仲間が得られるということは個人が実名でブログを続ける一番のメリットではないでしょうか。

○人と人をつなぐ

ブログで紹介した人や事例に触発されて新たな動きが始まり、あるいはブログで紹介した人と一緒に何かやろうという動きが広がっています。

皆様も自分の言葉で伝えるということに挑戦してみたいかがでしょうか。ブログが難しいという場合は、まずは、周りに口頭で伝えるということも一つの方法です。

地元の関係構築

地方公務員の最大の武器は、地元で詳しいということ。どんな分野でも地元の方々との関係構築がカギとなります。では、どうすれば地元と関係が構築できるでしょうか。四つの自治体に赴任した経験などを踏まえてお伝えしようと思います。

最初の3カ月から半年は、誰よりも地域のさまざまな会合や祭り、イベントに出席しました。会合の中で面白いと思った人のところには、翌朝出向きます。そうすると、関係性がぐんと近くなり



地域力おっは-クラブ テーマソング

あのまち このまち
手と手をつないだら ほら
おっはー おっはー
笑顔あふれだす
あなたのまちをお手伝い
地域力おっは-クラブ
おっはー



地域力おっは-クラブテーマソング

ます。

遠い方の場合には絵葉書を書きます。SNS全盛の時代だからこそ印象に残ります。

相手が大切にしていることを、大切にすることも重要です。掃除を大切にしている会社で、社員の皆様と一緒に掃除をしたのも良き思い出です。相手と対話する際には、相手の話を引き出し、できる限り聞くよう心掛けています。

何か頼まれたときは、チャンスです。頼まれごとには、全力で応えます。担当外でも知りませんと無愛想に答えるのではなく、一緒に考え、詳しい人につなぐことで、信頼関係が生まれます。

すぐに反応することも大切です。政策や事業では検討に時間がかかり、どうしてもすぐにアウトプットとして示せないこともあります。途中経過を報告し、あるいは、ブログやSNSなどで良いところを発信することはすぐにできます。出入口、出し入れ、出入りなどのように、何事も出すことから始まります。



芭蕉ゆかりの立石寺（山寺）を訪れた筆者

自分自身でイベントを企画することもある有効です。私は東京で、朝の異業種交流会「地域力おっはークラブ」を10年間主宰してきました。キーワードは、「気軽に、楽しく、中身濃く」です。真面目なことを真面目にするだけでは広がりません。アカペラユニットXU XUさんにテーマソングを作ってもらってみんなで歌ったり、紙芝居で案内したり、パンとコーヒーを用意するなど多様な動きや役割を加えることで、参加者も多様化します。内閣府の食堂のおばちゃんも「この勉強会は楽しい！」と毎回来てくれますが、プロとは違う視点で気づきを与えてくれます。

鹿児島県長島町の時は、よく地域を元気にするバーベキューを開催しました。異業種交流会と言っても地元の農家や漁師の方々は来てくれません。食材だけでなく、できること・やりたいことを持ち込むことで、新しい事業が次から次に生まれました。仲間づくりでは、場に働きかけることが重要です。バーベキューは参加者みんなの気持ち前向きになりますし、みんなに役割がある最適なツールです。

頼みごと、おわびごとは出向くのが基本ですが、用があるときに行くのは当たり前で、用がないときもふらっと立ち寄ることも有効です。そうすると、忙しくて出向けないときは、かえって先方が気遣ってくれるようになります。

複層的關係を持つのも良かったです。仕事だけではなく、趣味として、お客さんとしてかわることで關係性が深まります。

信賴關係が生まれてくると、今度はこちらから頼んでみましょう。良い人脈とかけて、良いスツと解きます。その心は、使わなければ傷むし、使いすぎて傷む。どんな案件でも、いつも同じ人をお願いするのはその人も疲れてしまいますが、たまにお願いする分にはかえって信賴關係が深まります。相手が「やりたい」ことをお願いすると、成功しやすいです。その際、地域の目立つ人は既にさまざまな役割を持っていますが、子育てを終えて落ち着いたパパ・ママや、実績はないがやる気はある若者などを発掘できるとな良いです。直接会うことにはどうしても時間的限界があり、マスメディアをうまく活用することが重要です。

ヒットをたくさん打つためには、一つだけ真理があります。とにかく打席に立つことです。記事の掲載も同じで、長島町副町長の時は、毎週必ずプレスリリースを出すよう心掛けていました。プレスリリースのコツは、新しいこと、数字で示せること、プレスリリースを読むだけで記事が書けることの3点です。

記者との關係構築においても、前述した場に働かせることや複層的關係が有効です。例えば、東京から来た記者ならば、副町長室で話した後、

漁船をチャーターして夕日が輝く海を走って、離島のイベントと一緒に参加したこともありました。地元の記者ならば、長島町とは關係がない記事でもその記者の署名入りの記事があると、お客さんとして、あの記事面白かったですね、と声をかけます。

直接伝えるより、間接的に伝わることの方がより響く場合があります。グー、チョキ、パーの三角形の關係です。グーは、パーに負けますが、チョキを介すると勝つことができます。マスメディアを介するのも一つの方法です。

やりたいを貫く

今こそ地方創生の第一人者として捉えられるようになりたいが、決して順風満帆ではありませんでした。今振り返れば恥ずかしいこともたくさんあります。現場にこだわるあまり、制度官庁の主流を歩まなかったように思います。

それでも「やりたい」「地域を良くしたい」という気持ちを貫くことが大切です。最初から評価を追い求めると逃げていきますが、必ず見てくださる人がいます。続けていると、思わぬ追い風が吹くときもあります。

これから活動する方は、「小さな丘の頂上に旗を立てる」ことを意識するとうまくいきやすいです。小さくとも自分が「やりたい」分野の第一人者になるということです。どんな井戸も深く掘れば必ず水脈とつながります。

皆様の「やりたい」を大切に、それぞれの分野での御活躍を祈念しております。

千年の暮らし息づくコミュニティの新たな挑戦

―里山の技術・文化・景観を未来へつなぐ―



特定非営利活動法人
かみえちご山里ファン倶楽部事務局

● 神崎 淑

中山間地域でのコミュニティの維持や、都市部住民のこうした地域との交流、移住は、人口減少社会における地域活性化策の柱として期待される。地域活性化センターでは、「移住・定住・交流推進支援事業」として、地域団体もしくは市町村等が自主的・主体的に実施する交流事業などを支援している。

今回、令和2年度に同事業を活用した新潟県上越市の取り組みを、特定非営利活動法人かみえちご山里ファン倶楽部事務局の神崎淑氏にご紹介いただいた。

(企画グループ)

上越市中ノ俣というところ

上越市は新潟県の南西部に位置し、人口18万8000人が暮らす、県内3番目の人口規模の市です。地域の約7割が中山間地域であり、多様な魅力や豊かさにあふれています。中山間地域のひとつである中ノ俣は、新潟県上越市の西部、市街地から峠を四つ越えて車で30分ほどの

谷あいには位置する集落です。多いときは4メートル以上の雪が積もるこの地に集落ができたのは千年以上前といわれ、かつては100戸700人が住み、稲作をはじめとした農業や畜産業のほか、炭焼きに代表される林業を主な生業としていました。現在では30戸50人ほどで、住民のほとんどは75歳以上と過疎高齢化が進み、この地域で暮らし、生き

ていくための技術や知恵とともに、そうした暮らしのなかで育まれてきた文化も同時に消滅の危機にあります。

特定非営利法人かみえちご山里ファン倶楽部では、それら千年以上続いてきた技術や知恵、文化を、これからの未来を生きていくために必要なものとして捉え直し、それら技術や知恵、文化を記録し伝承する取り組みや、住民の暮らしと地域コミュニティそのものを支える活動など、さまざまな試みを地域住民とともに行ってきました。令和2年度の本事業では、棚田での稲作技術の伝承を行う「棚田学校」、稲の副産物を活用した文化を伝承する「わら細工体験会」と、通年観光を促進するための「中ノ俣古道の整備」を三つの柱として活動しました。

耕作技術を学ぶ棚田学校

かみえちご山里ファン倶楽部の行う棚田学校がいわゆる棚田オーナー制度と大きく異なるのは、参加者が一年を通して自分で棚田を耕作することのできる技術を身に着けることに主眼を置いている点です。年に8回開催日を設け、地域の農家に講師となってもらい、メインである田植えや稲刈りだけではなく、あぜ塗りや堆肥まき、田起こしなど田植え前の準備から、田んぼの周りの草刈りや田んぼの中の草取りなど田植え後の棚田の管理作業、束ねた稲を自然乾燥させるためのハサづくりやハサがけ、脱穀などのお米を仕上げる作業まで、ほぼすべての技術を体験し習得します。

年8回の開催日以外にも、地域の組合が実施する用水の清掃作業や、獣害対策の電気柵の設置作業など、米づくりに関する共同作業が行われる際には棚田学校の参加者にも積極的に声をかけ、地域の一員として参加してもらっています。そうすることで、棚田学校参加者と地域住民との交流が生まれ、消滅の危機にある棚田耕作の技術を次世代に受け継ぐとともに、参加者には地域への帰属意識が生まれます。実際、継続して何年も棚田学校へ通っている参加者

の中には、棚田に関わる共同作業にとどまらず、地域内の草刈り作業や河川の清掃のほか、神社のお祭りにも参加してくれている方もいます。このように、棚田学校を通して関係人口が増加しつつあります。参加者は地域住民との交流を通して地域への帰属意識を高め、地域に頻繁に通い、コミュニティ維持の一端を担うようになるのです。

わら細工体験会

この地域では棚田を中心にさまざま



わら細工体験会にて
縄をなって釜敷きづくり



活動の拠点となっている中ノ俣の棚田



中ノ俣古道の散策会



棚田学校の風景 練習田んぼで
地域講師から草取りのやり方を教わる

まな文化が育まれてきましたが、稲の副産物を利用したわら細工もその一つです。わら細工体験会では、まずは縄をなうところから始め、鍋敷きや卓上ほうきなどの簡単な小物から、積雪時に履くふかぐつなど複雑な技術が必要とする難しいものまで、さまざまなわら細工の作り方を地域の方に教えてもらい体験しています。材料となるワラは、コンバインでの稲刈りが主流となった現在ではとても貴重なものです。このワラの調達にも、体験会の参加者の有志

が関わってくれ、

棚田学校の参加者とともに、地域の棚田で稲を育て、ハサガけをして確保しています。また、しめ縄に使うワラは長くて青いものが必要なため、古代米と呼ばれる品種を種から育てて青田刈りを行っています。これらと並行しながら、令和2年度は、草履やしめ縄など、体験会で行う簡単なわら細工について、手順書を

完成させることができました。これを活用して、今後もさまざまな方に技術を伝承していきたいと考えています。

謙信公時代から残る

中ノ俣古道

上越市には日本百名城に数えられる、上杉謙信の居城であった春日山城跡があります。春日山城は山城であったと言われ、その砦や支城群が上越市内一円に広がり、それらを結ぶ古道が網目のように張り巡らされています。中ノ俣にも、支城群のひとつである中ノ俣城址があり、謙信公の時代からと思われる生活道も含めた古道も残っていますが、近年まで整備がなされず、通行できない状態でした。現在これら古道の整備を進め、令和2年度には、別地域で活動する団体の整備する散策道とながり、北陸新幹線の上越妙高駅付近から、中ノ俣地区まで歩いてくることのできるようになりました。開催した散策会には、コロナ禍で新潟県外からの参加者は受け入れられませんでした。それでも多くの方に参加していただき、この地域の歴史資源を大いにPRすることができました。また散策会に参加できない方や案内看板も整備することができま

した。今後は未整備の古道について整備を進めながら、上越市内の他地区で古道を整備している団体ともつながり、上越市内一円を通年で観光できるコンテンツへと発展させていきたいと考えています。

「コミュニティ」の維持に向けて

棚田学校、わら細工体験会、中ノ俣古道という3本の柱を行うことで、中ノ俣の交流人口は確実に増加しています。今後交流人口の増加にとどまらず、移住者を受け入れていくためには、地域内に現金収入を得られる仕事を創り出すことも不可欠です。この3本の柱を今後も続けつつ、古くから活用されてきた鉱泉など新たな魅力も発掘しながら、さらなる交流人口の増加を図ります。これを足掛かりに、地域内にある宿泊施設等を活用して観光収入を増やし、雇用の創出に取り組んでいきたいと考えています。また地域内の空き家について調査し、移住者の住まいや新たな交流施設としての活用についても検討していく予定です。千年以上続き、失われようとしているこの地域に残る技術や文化を、そしてこの地域コミュニティを未来に残すため、これからもさまざまな活動を展開していきたいと考えています。

官民協働による地域資源の活用

―地域おこし協力隊による―

薬草を活用した地域づくり―

飛騨市地域おこし協力隊 ● 岡本文

地域活性化センターは、地方創生の担い手となる人材の養成を目的に「地方創生実践塾」を実施している。7月17日（土）～18日（日）に飛騨市で開催された令和3年度実践塾について、主任講師である飛騨市地域おこし協力隊員の岡本文氏にご報告いただいた。（地域創生グループ）

薬草と呼ばれて飛騨へ

「植物の力で体の中を整えて元気になりたい」そう思い始めたのは2018年の夏。当時東京の花屋に勤めていたが、大学時代から乱れ始めた食生活が響いたのか体の不調が見えなくなった状態であった。そんな時に出合った一冊の本の中で目に留まった「飛騨古川に薬草料理を提供する老舗旅館がある」という一文に導かれ、蕪水亭（ふすい）を予約。苦くて見た目もあまり……というような薬草のイメージがどう覆されるのか想像もできないまま、2018年8月2日に初めて飛騨の地に降り立った。そこで味わったのは、鮮やかでバラエティに富んだ品々だった。この地に

生えている植物でこんなに美味しいものができるなら……と薬草の活用にも夢を膨らませた日から3年。隊員の卒業論文を出すかのような気持ちで実践塾に臨んだ。

真剣に向き合うことから生まれるもの

薬草の普及活動以前に大切なのは地域を知り自分を認めてもらうことだと感じた私は、できる限りの家を飛び込みで訪ねた。ここに来る前は千葉県浦安市に住み、高校時代から銀行で営業をしていた頃は東京に通っていた。千葉・大阪・福岡と引越し四つの小学校を渡り、パリ等での花屋修行で3年ほど日本を離れたこともあって異なる環境で暮らすこ

とにはある程度慣れていたつもりだったが、飛騨弁、豪雪、車社会、と乗り越えるべきものは少なくなかった。そのうち飛騨を出て行くのではないかと疑われていては本音など話してもらえないはずがない。その人と正面から向き合い、暮らしを尊重し、どれだけ寄り添えるかで、もらえる野菜の量が変わったり助けてくれたりする人が周りに増えていくのではないかと思うのである。

講演・薬草体験施設見学・料理交流会 【1日目】

飛騨市薬草ビレッジ構想推進プロジェクトとして活動する私たちは、2001年に薬草の権威として知られた村上光太郎氏（故人）を招聘し薬用植物調査を実施した頃から活動している団体や2015年に創られたNPO法人薬草で飛騨を元気にする会、アルプス薬品工業株式会社、岐阜県中山間農業研究所、現飛騨市長の下結成された課をまたいだ市職員チームで構成されている。

今回の実践塾では、このプロジェクトに関わる3人を特別講師に迎え入れた。

まちづくりの視点から見た地域資源の可能性

まずは、自ら薬草を採取し健康づくりに役立てている飛騨市の都竹淳

也市長。同市長は、地域外から注目を集め、市民自身が楽しい面白いと思うことこそが地域を元気にする原動力になると考え、地域資源の徹底した発掘と活用のためのさまざまな事業を実施している、と説明した。その中でも力を入れているのが薬草であり、岐阜県職員時代に市の職員から全国薬草シンポジウム2014の相談を受けたことから始まり、今に至った経緯について話をした。官民協働においては各々が自由に気持ちよく活動するために関係者をつなぐコーディネーターが必要であると、それが地域おこし協力隊であり「飛騨の薬草」岡本文」となることを目指したと述べた。

次に私の講演を挟んで、薬草カフェ蕪水亭OHAKOでの薬草七味作りと2019年10月にオープンした薬草拠点施設ひだ森のめぐみの見学を2グループ入替制で行った。市長の講演でも拠点施設の創設経緯やメディアからの注目度について語られたが、昨年薬草の乾燥・粉末加工サービスを開始したことで地元の人にも頻繁に利用されるようになり、昔を知るお年寄りから小学生や赤ちゃんまでもが交流できる場所になっている。

地域資源としての「薬草」の活かし方

会場を蕪水亭に移して行われたN

P O 法人薬草で飛驒を元気にする会理事長の北平嗣二氏の講演では、村上光太郎氏との出会いからNPO法人の設立、普及に立ちはだかる商品開発や薬機法の壁等についての話とともに、日々の食事でミネラルを補給することが一番大切であることが語られた。

薬草料理交流会

初日の最後は薬草を美味しく食べる工夫が詰まった料理を楽しんだ。調理法についての質問や想像以上に美味しいという感想が飛び交い、大いに盛り上がった。

フィールドワーク・講演・グループワーク

【2日目】

初日に続き梅雨明けの猛暑となったこの日は、薬草が身近に自生している様子を見るために市役所から車



フィールドワークの様子



グループワークの様子



講師陣を囲んでの集合写真

で5分の場所を案内した。前夜の薬草料理のおかげで体調が良いという声を聞きながら、この後講演する白川靖之氏とコースを分け1時間程薬草の解説をしながら歩いた。

現代に息づく薬草と地域連携について

市役所に戻り、アルプス薬品工業株式会社の白川靖之氏による講演。生薬の原薬を製造する会社がこのプロジェクトにどう関わっているのかを自身の希望も含めて語った。薬草ビジネスを試みて挫折した多くの自治体からの相談例にはうなずく参加者も多かった。

グループワーク

この実践塾のまとめに向けて行われた40分の話し合いでは、2日間で学んだこと、今後に生かしたいこと、講師に聞きたいことの三つについ

て、全国各地で奮闘する参加者各々の課題を挙げながら活発に意見交換が行われた。

濃厚な6種の薬草カレーの昼食を取り、グループ毎に結果を発表。地域をおこす火種を見つけ、地域をつなぐ人材を活かし、官民のバランスを保ちながらコミュニケーションを取ることで大切であり、皆が自由に組み立てる環境を作っていきたいといったまとめとなった。

地域プロジェクトマネージャーとして

この9月末で地域おこし協力隊の任期を終える私は、その先の生業と暮らし方についてずっと考えてきた。まいた種がこれから芽を出すという

ところで身を引くわけにもいかない。何より自分自身がそれを楽しみにしているのだから。そんな風に考えていた時に耳に入ってきたのが国の新制度「地域プロジェクトマネージャー」。市長が協力隊に期待した「掘り起こし、つなぎ、まとめる」ことを続けることができるチャンスだと感じ、応募することにした。3年間で築いた人脈とこの地域で生きる術を活かせたら嬉しい。これがひとり誇りをもって「薬草のまち、飛驒」で生きていることを語ることができる場所を創っていきたい。

地方創生実践塾（岐阜県飛驒市）の概要

テーマ：官民協働による地域資源の活用

～地域おこし協力隊が中心となって取り組む薬草を活用した地域づくり～

1日目 7月17日（土）

特別講師 講義

「まちづくりの視点から見た地域資源の可能性」

都竹 淳也氏（飛驒市長）

主任講師 講義

「地域資源を活用した魅力的な地域づくり」

岡本 文氏（飛驒市地域おこし協力隊）

フィールドワーク（薬草のワークショップ体験とひだ森のめぐみ見学）

特別講師 講義「地域資源としての「薬草」の活かし方」

北平 嗣二氏（NPO 法人薬草で飛驒を元気にする会理事長）

2日目 7月18日（日）

フィールドワーク（身近な場所に潜んでいる薬草見学）

特別講師 講義

「現代に息づく薬草と地域連携について」

白川 靖之氏（アルプス薬品工業株式会社販売管理課課長）

グループワーク

講評

出歩きたくなるストリートデザインとは

—にぎわい創出の要件を整理—

「ストリート」はどんなまちにも存在しているため、ストリートによるにぎわい創出の要件を整理することは、条件の異なるさまざまな地域でのにぎわいづくりに寄与できると考えた。単なる通行の場としてではなく、滞在・交流といったストリートが持つ空間価値に着目し、思わず出歩きたくなるストリートには何があるのかを3地域から検証することによりにぎわい創出に必要な要件について調査を行った。

魅力あふれる「さかさ川通り」

東京都大田区は、昭和終期から大田区南部地域の特性を生かしたまちづくりの実現に向けて蒲田地区の再開発を行ってきた。その中で地域住民が安心して安全に楽しく歩くことができるまちづくりに力を入れることとし、さしあたり蒲田駅と京急蒲田駅の間に位置するさかさ川通りに注目。普通の道路整備ではなく、にぎやかなイベントができる道路整備を行った。

開発前の旧さかさ川通りは用水路を暗渠とした上に整備された薄暗い2車線道路であったが、開発後は、日当たりが良く、かつての流れの面影を表現するために川の流れを連想させるデザインとなっている。また、自然素材を生かしたユニークなデザインのにも、バリアフリーや安全に配慮された設計になっている。

平成26年にさかさ川通りが竣工してから、通りの運営とエリアマネジメントの主体として設立された任意団体（現在は法人化）により、定期的に通りを歩行者天国にして「おいしい収穫祭」や「青の晩餐会」といったイベントが開催されている。中には約1万9000人が訪れるイベントもあり、にぎわいや関係人口の

創出の場となっている。

歩いて楽しい通りをカタチに

愛知県豊橋市は、「歩いて暮らせるまち」を具体化するものとしてストリートデザイン事業を実施している。事業対象地のひとつである萱町通りの特色は、広く確保された活動空間と上質なデザインである。空間に余裕があるため、安全な歩行はもとより、マルシェのような活動を可能としている。ベンチや植栽は人々の活動を邪魔することのないように配置され、ベンチは休憩をきつかけとした人の滞留を起こし、植栽は優れた景観形成に役立っている。いずれも、通りに人を呼び、そして、新たなコミュニケーションを生み出す装置として機能している。

通りの空間デザインは上質さが重視された。これは、行政が地域住民と複数回にわたり共有したこの通りに抱くイメージを具体化したものだ。幾度となく開催されたワークショップでは、利用したくなるアイデアはもちろんだが、通りのもつ歴史や個性がもつとも尊重された。

豊橋市のストリートデザインの特徴は「コミュニケーション」を重視したことだと私たちは感じている。その結果、行政と地元住民とが一体となってアイデアをカタチにすることができた。そして、カタチになった通りは、歩行だけでなく、人と人

とが遭遇し、新たなコミュニケーションが生まれる場となっている。

復興を機に歩行者専用「レンガみち」

宮城県女川町は震災復興まちづくりに当たって、安全な高台に住宅地を整備した上で、まちの中心に都市機能を配置し拠点化を図ることで、人の流れを意識的に中心部に集約することを目指した。その結果、女川駅前地区に商業施設や公共施設などが集まっている。

女川駅前の広場から女川湾に向かって歩行者専用道路「レンガみち」が広がっている。レンガみちにはその始点から終点まで中央部に並木が一直線に配置され、その並木により通る人と滞留する人それぞれのための空間が緩やかに区分されている。レンガみちの整備だけで人が歩き、にぎわいが生まれているわけではなく、隣接する商業施設「シーパルピア女川」や公共施設「まちなか交流館」などの街路空間全体が一体となって、まちの中心部を歩く心地良さを演出している。

復興まちづくりは、行政と民間の専門家の協力の下、官民がうまく連携したためにスピード感を持って進められてきた。ある程度設計が固まった段階で市民の声を聴き、生かす過程を経て、被災から4年後の平成27年12月、プロムナードレンガみち

と、隣接する商業施設シーバルピア女川、まちなか交流館が完成し、現在の状況に至っている。

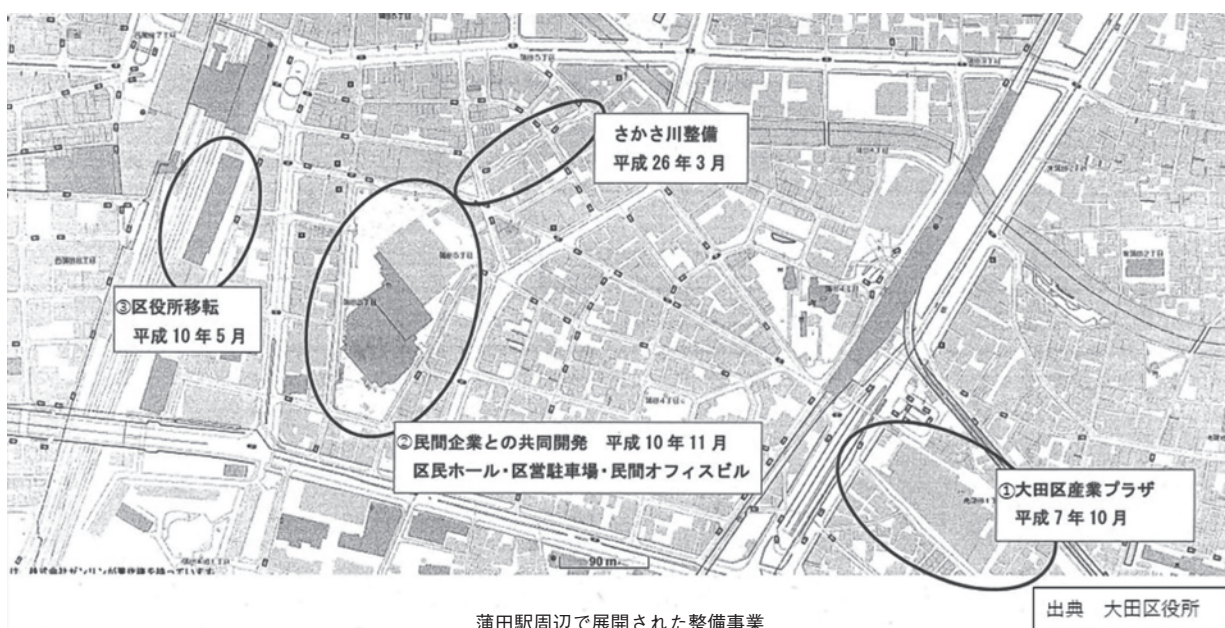
まとめ

三つの事例から導き出せる共通のキーワードは視認性であった。視認性とは、「目で何かを見たときに、対象物や対象物が持つ意味合いについて、正しく確認・理解ができる」ということである。また、ストーリーのハード整備とソフト整備両方において、行政以外の人が関わることが、この視認性を高めることに資するだけでなく、行政と地域住民との信頼関係構築にもつながっていた。大田区の地域住民との話し合い、豊橋市の複数回にわたり開催したワークショップや、女川町の公民連携の取り組みから、地域とのより良い信頼関係を築く大切さを改めて認識することができた。調査地のストーリーはいずれも個性が大切にされ、その個性は多くの関係者のコミュニケーションによって言語化され、共有されていた。さまざまな立場の人が関わ

て、行政以外の人が関わることが、この視認性を高めることに資するだけでなく、行政と地域住民との信頼関係構築にもつながっていた。大田区の地域住民との話し合い、豊橋市の複数回にわたり開催したワークショップや、女川町の公民連携の取り組みから、地域とのより良い信頼関係を築く大切さを改めて認識することができた。調査地のストーリーはいずれも個性が大切にされ、その個性は多くの関係者のコミュニケーションによって言語化され、共有されていた。さまざまな立場の人が関わ

ることでストーリーに対する視認性が高まり、ハード整備後にストーリーをさまざまな活用する。それによりにぎわいが生まれ、さらにストーリーに対する歩行者のイメージが豊かになる。こうして、歩行者が感じたイメージが、新たな歩行者を生むことにつながっていくのではないかな。

地域活性化センター副参事
●西谷 拓真
(京都府井手町より派遣)
●赤松 亮 (奈良県生駒市より派遣)
●青木 大 (愛知県大府市より派遣)



蒲田駅周辺で展開された整備事業



豊橋のストリートを紹介する「豊橋まちなかモノ語りマップ」



女川駅前の広場から女川湾に向かう歩行者専用道路「レンガみち」

産学官連携によるスマートシティの推進

—先進技術活用のための連携手法—

ICT（情報通信技術）やAI（人工知能）等の先進技術によって分野横断的に地域課題を解決するスマートシティへの取り組みが期待されている。しかし、自治体のみの力でこうした課題を解決することは困難であり、企業の持つ技術力や専門知識を持った人材、研究機関等との連携が必要不可欠である。

千葉県柏市、香川県高松市、愛媛県西条市に赴き、スマートシティ実現にはどのような連携手法が効果的であるかを調査した。

スマートグリッドを初運用

柏市の柏の葉スマートシティの推進主体である柏の葉アーバンデザインセンター（以下「UDCK」という）は、産学官の各主体から構成される一般社団法人であり、柏市、三井不動産、東京大学、千葉大学などから職員が派遣されている。これまでの取り組みとして、各地区の電力消費をリアルタイムで把握し、電力を街区間で相互に融通する「スマートグリッド」を国内で初めて運用した。日立製作所の協力によって開発したAEMS（エリアエネルギー管理システム）は、電力料金はもちろんCO₂排出量の可視化も実現し、住民の省エネ意識を高めるとともに、地域内の各施設の太陽光発電や電気自動車などの電源をコントロールし、電力を融通し合うことで災害時の電力供給も可能としている。

企業等との連携においては、各主体の管理職を含めた会議を月に2、3回程度開いており、この会議がプロジェクトを進めるうえで重要な役割を果たしている。

また、プロジェクトを進めるうえで、UDCKは「柏の葉国際キャンパスタウン構想」を定め、東京大学や千葉大学などの研究機関が立地す

るまちのポテンシャルを活かして、社会課題解決モデル都市づくりを実践するための具体的な目標と方針を示している。この構想に沿って考えることで、皆が同じ方向を向いて進むことができている。

オープンデータの官民活用 共通のプラットフォーム導入

高松市はオープンデータを活用するための共通プラットフォームを国内で初めて導入した。複数分野のデータを一元管理し、IoT技術により収集、蓄積、可視化、分析する仕組みを構築することで、行政だけでなく市民や企業もオープンデータを利用できる。また、産学官が参画する「スマートシティたかまつ推進協議会」と連携し、それぞれの視点からデータ活用による地域の課題解決に取り組んでいる。

事業の推進は、分野ごとにワーキンググループを形成し、個別の事業について専門的に検討することで成果をあげている。産学官が連携しながら実証実験や効果検証を行うことで、防災分野における県と連携したリアルタイムでの防災情報の可視化や、観光分野におけるレンタサイクルの動向分析からの観光施策の検討など、複数分野のデータ活用による地域課題の解決を進めてきた。

各事業では、失敗を恐れず試験的に取り組み、うまく機能しなければ

次に切り替えるという姿勢で臨んでいる。新しい取り組みを連携して試行することにより、多様な意見や発想を得るとともに、企業が実証実験の場として価値を見いだせるよう取り組むものである。

また、企業との契約では、対話を重ねる中で価値を見極めることを重視しており、行政、企業双方に有益となるような関係性を築いていた。

教員がテレワークで 使える校務支援システム

西条市は、手作業が多く残る学校現場で教員の負担を軽減するため校務の情報化を推進している。全国に先駆けて校務支援システムの構築や教員のテレワークシステムを実現し、平成27年からは、自宅での校務支援システム使用が可能となっている。

平成28年に開始した「ICTを活用したスマートスクール実証事業」では、地元企業がプロジェクトマネージャーとなり、国や大学等研究機関との協力体制を構築し、生徒等の情報が登録された校務システムと、授業支援やデジタルドリルなどを行う授業・学習システムの連携を実現した。

本事業では、地元のシステム基盤構築事業者である四国通建がプロジェクトマネージャーを務めている。加えて、校務系の専門事業者や学習

系の専門事業者などの企業や地元大学と連携して取り組みを進めた。複数の主体と協働してプロジェクトを進める際には、タスク管理ツールTrelloや、グループウェアStackを活用してコミュニケーションを図った。特にStackでは、そのスレッド数が約5000以上に上るなど、このツールが連携に大きな役割を果たしたことがうかがえる。

また、四国通建が中心となり、子どもたちの未来を良くしたいという思いを共有することで各主体間の方向性を統一。行政からの一方的な委託関係ではなく、本音で議論する関係を築いている。

産学官連携へ向けて

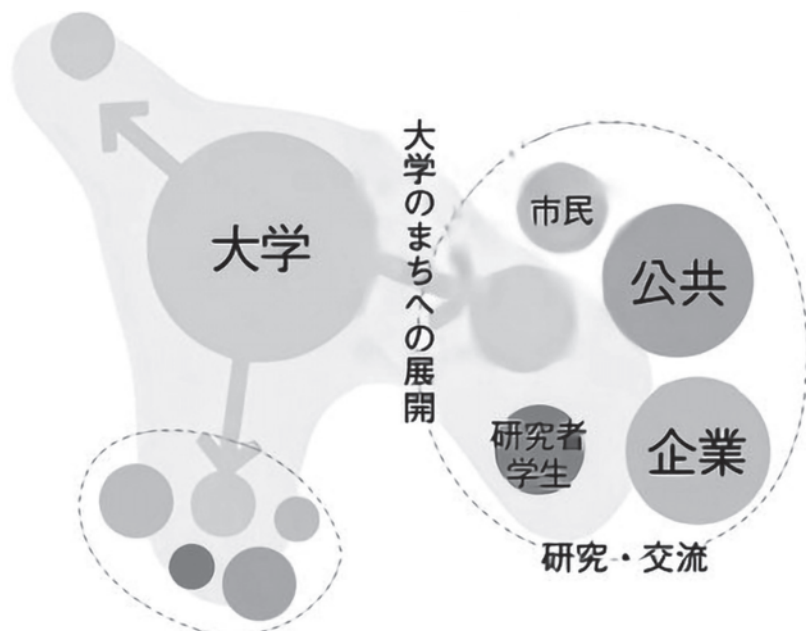
今回調査した自治体では、連携手法はそれぞれ異なるが、地域の特性や既存の関係を活かしながら各主体と効果的な連携体制を構築してい

た。また、行政側の利益だけでなく、参画する各主体にとって価値が生み出されるような事業展開をすることで、産学官それぞれが課題発見や解決策の提示をするなど、主体性をもって事業に取り組んでいた。このように各主体との連携が進んでいる自治体では、UDCKにおける柏の葉

中心市街地でのまちづくりなど、スマートシティ以外のさまざまな分野においても成果をあげている。産学官連携は国や先進自治体の方針に合致しており、企業等も自治体との連携に価値を見いだしている。これらの全国的な潮流のなかで、課題解決には多様な主体の力が必要不

可欠であることを自治体が再認識することで、連携に向けた方向性を加速させることができるはずである。

地域活性化センター副参事
●野口友大（茨城県古河市より派遣）
●嶋田拓実（福井県より派遣）
●阿部華子（青森県深浦町より派遣）



大学とまちが融和した知的交流のある「国際学術研究都市」

柏の葉国際キャンパスタウン構想における連携の概要

設置イメージ



制御ボックス設置(例)



水位センサー設置(例)



水位観測河川・水路(中ノ川)

河川および水路の水位センサー・制御ボックス (高松市)

地域の普遍的な価値を保全するために —奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び 西表島世界自然遺産登録—



環境省沖縄奄美自然環境事務所
国立公園企画官

● 浪花 伸和

登録までの道のり

奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島世界自然遺産は、日本列島の南端部に約1200kmにわたって弧状に点在する琉球列島の一部であり、総面積は4万2698ha、鹿児島県の奄美大島と徳之島、沖縄県の沖縄島北部と西表島の四つの地域から構成されます。

2003年5月、環境省、林野庁が共同で設置した学識経験者からなる「世界自然遺産候補地に関する検討会」において、「知床」「小笠原諸島」とともに「琉球諸島」が世界自然遺産の登録基準に合致する可能性が高い地域として選定されました。「知床」と「小笠原諸島」はそれぞれ2005年、2011年に世界自然遺産に登録されました。残る「琉球諸島（奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島）」の登録に向けて、

国が責任をもって遺産地域を管理することのできる国立公園等の保護地域の指定等の準備を進め、2016年4月に西表石垣国立公園を拡張、2016年9月にやんばる国立公園を指定、2017年3月に奄美群島国立公園を指定しました。

それと平行する形で世界遺産への推薦書は、奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島世界自然遺産候補地科学委員会において検討を進め、2017年2月、本件を推薦する閣議了解を経て日本政府よりユネスコに提出いたしました。2018年5月、世界自然遺産の科学的な諮問機関である国際自然保護連合（IUCN）の評価結果がユネスコから通知され、世界遺産一覧表への「記載を延期」することが適当と勧告されました。この延期勧告とともに伝えられた主な指摘は、当該資産は世界自然遺産評価基準のうち「生態系」には

該当しないが、米軍北部訓練場返還地の推薦地への追加及び分断された小規模な区域を可能な限りつなげることで推薦地の連続性を確保すれば、当該評価基準の「生物多様性」に該当する可能性があるというものでした。2018年6月、閣議において本件推薦をいったん取り下げる

こととなりましたが、その後IUCNの指摘事項に対応した上で、2019年2月、日本政府よりユネスコに2度目となる世界遺産への推薦書を提出いたしました。本推薦資産の登録審議が行われた第44回世界遺産委員会は2020年6月に開催を予定していましたが、新型コロナウイルス感染症の世界的蔓延の影響で2021年に開催が延期されました。2021年5月、IUCNの2度目の評価結果がユネスコから通知され、世界遺産一覧表への「記載」が適当と勧告されました。同年7月26



金作原（奄美大島）

日18時42分、第44回世界遺産委員会において、本推薦資産の審議が行われ、世界遺産一覧表への記載が決定しました。2003年に日本の世界自然遺産候補地として選定されてから実に18年という年月を経て、登録にたどり着いたことになります。

世界遺産としての 顕著な普遍的価値

前述のとおり当該世界自然遺産は、「生物多様性」という評価基準に該当することによって世界自然遺産に登録されました。具体的には、イリオモテヤマネコ、アマミノクロウサギ、ヤンバルクイナなど、IUCNのレッドリストの絶滅危惧種95種（そのうち75種は固有種）を含む陸生動

植物の生息・生育地であること及び島の成り立ちを反映した遺存固有種と新固有種の多様な事例がみられることから、世界的にみても生物多様性の保全にとって極めて重要な自然の生息・生育地を包含した地域であることが評価されたポイントです。

世界遺産の価値を守り 将来に伝えるために

世界遺産登録の意味は、その価値が将来にわたって維持されることを世界に向けて約束することであると考えています。しかしながら、その約束を果たすために解決すべき課題は決して少なくありません。実際に

世界遺産委員会で登録が採択された決議の中には、以下の四つの要請事項も含まれており、これらへの措置の進捗状況と結果を2022年12月1日までに世界遺産センターに報告することが求められています。

①特に西表島において、観光の収容能力とその影響に関する厳しい評価が実施され、改定観光管理計画に統合されるまでは、観光客の訪問レベルを現在のレベルに制限する、または現在のレベルより減少させること。

②絶滅危惧種の交通事故死を減少させるための交通管理措置の有効性

を緊急に見直し、必要な場合は強化すること（アマミノクロウサギ、イリオモテヤマネコ、ヤンバルクイナを含むがこれらに限定しない）。③可能な場所では、強固な人工的インフラから、水流回復、植生回復、多様な生息地の形成をもたらすような、自然に基づく技術や再生アプローチの採用に移行するため、包括的な河川再生戦略を策定すること。

④緩衝地帯での森林伐採について、個々の伐採区域の数と総面積の両方において、現在のレベルに制限する、または現在のレベルから減少させ、いかなる伐採も厳格に緩

衝地帯内に限定すること。

世界遺産委員会からの「観光管理」「ロードキル（動物が道路上で車にひかれて死ぬこと）対策」「河川再生」「森林管理」という四つの要請事項以外にも、外来種の防除や違法採取対策も重要な課題です。これらの課題に対しては、管理機関である環境省、林野庁、文化庁、鹿児島県、沖縄県及び関係12市町村が中心となつて対応していくこととなりますが、この前例のない難題を乗り越えていくためには、地域住民のご理解とご協力が必要不可欠と考えています。これまでの世界自然遺産を目指してきたプロセスの中でも、地域住民を含む多くの関係者の間で交わした議論が原動力となりさまざまな課題を解決してきました。そして、その議論は自然遺産の価値の保全方法という範疇を超えて、地域の将来のあり方も含まれていたものと考えています。この素晴らしい自然資源を活かした持続可能な地域社会をどのように構築していくのかを地域の方々と一緒に考えて実現していくことが、資産を守り将来に伝えるために進むべき道であると信じています。



アマミノクロウサギ



イリオモテヤマネコ



ヤンバルクイナ

吉野杉に蘇芳色が映える

Cafe & Bar も

「奈良まほろば館」移転・

リニューアルオープン！



奈良県観光局
奈良まほろば館

館長

● 古川 義富美

奈良の 上質な空間を提供

奈良まほろば館は、東京日本橋で12年間にわたり、観光情報の発信や県産品の販売を通じて、奈良の魅力発信してきましたが、日本橋エリアの再開発に伴い、令和3年8月10日に新橋に移転しました。首都圏における奈良県の情報発信の拠点として、特産品や工芸品を展示・販売す

るショップや観光案内だけでなく、奈良の食をお楽しみいただけるレストランを併せもつ複合施設である奈良県ブランドショップ「奈良まほろば館」として新たに生まれ変わりました。

リニューアルした奈良まほろば館は、県産材を活かした内装も大きな特徴です。古くから林業が営まれ、全国有数の優良木材の生産地として知られている奈良県らしく、内装は

国内有数のブランド材

「吉野杉・吉野櫨」に代

表される県産材を活用し、空間から奈良の上質感を演出しています。1

階のShopやCafe & Barでは、飛鳥・奈良時代伝わり正倉院宝物にも数多く使用されている「蘇



奈良まほろば館外観、蘇芳色の暖簾が目印



2階 TOKi の Bar コーナー

芳色」と県産材が鮮やかに映える空間としています。2階のRestaurant & Bar「TOKi」は、県産食材にこ

だわった料理が映えるモノトーンの内装になっており、カウンターや吊装飾、壁面などに県産材を活用し、1階とは異なるテイストの県産材の表情を感じていただけます。

季節に合わせたメニュー提供

奈良では、長い歴史の中で培われてきた伝統を活かした工芸品や豊かな自然に育まれた食文化等が発展してきました。そのような歴史ある奈良の魅力がたくさん詰まった場所が奈良まほろば館です。

Shopでは、奈良生まれの魅力的な商品の背景もご紹介しながら、暮らしが豊かになるような奈良のいい物を展示・販売しています。優れた県産品を厳選し、展示・販売することで、県産品のイメージアップ、ブランド力の向上を目指します。Cafe & Barでは、奈良の郷土料理や、奈良県内で人気上昇中のかき氷など気軽に奈良のフードメニューを楽しむことができます。

奈良まほろば館の観光案内には、奈良のご当地検定の最上級である奈良まほろばソムリエの資格をもつ観光コンシェルジュが常駐しており、

幅広い知識と最新の情報から、よりよい奈良の旅をご提案しています。

Restaurant & Bar「TOKi」では、

奈良の生産者と連携し、料理を通して季節の素材や奈良の風土と歴史を皆様に感じていただけるようにメニューを構成しています。季節に合わせ少しずつ移ろう料理をレストランではコースで、バルエリアでは一皿ずつお楽しみいただけます。

社寺や歴史の講座も

イベントルームでは、奈良の有名社寺や歴史専門家による講座、文化や食を体験できるワークショップなど、奈良についてより深く学ぶことができます。イベントを実施します。

移転リニューアルオープンした奈良まほろば館では、新しくできたさまざまな機能を活かしながら、観光、食、特産品、伝統工芸などの情報を発信し、県の認知度とブランド力向上を図ることで、今後の観光需要の回復を見据えた首都圏等から県への誘客、県産品の販路拡大を通じた地域活性化を目指します。奈良県ブランドショップ「奈良まほろば館」にご来館いただき、奥深い奈良の魅力を体感していただくとともに、コロナ禍が落ち着けば、ぜひ奈良にもお越し下さい。



東京都港区長 武井 雅昭

全国各地域とともに 成長・発展し、共存・共栄を推進

東京タワーをバックに、芝・増上寺の山門前を走り抜けていくランナーの姿を映像でご覧になった方も多いと思います。マラソンや駅伝の定番コースで、外国人観光客にも人気のスポットですが、この光景に象徴されるように、港区は個性豊かな街並み、歴史を感じさせる文化財や史跡など、近代的なものと伝統的なものが調和した魅力あふれるまちです。寺社や大名屋敷の名残の大きな樹木や樹林などの緑に加え、近年では大規模開発によって生み出された緑も多く、お台場の海、芝浦運河など豊かな水辺空間にも恵まれています。

国内外からのアクセスに優れた港区は、多くのメディアや事業所、80カ国を超える大使館や多数の外資系企業が集積する国際色豊かな都市でもあり、多様性に富んだ方々に支えられています。

港区の人口は、本年1月1日現在25万9036人ですが、地域の課題を地域で解決し、区民がより身近な場所ですまざまな行政サービスを受けることができるように、区内五つの地区にそれぞれ総合支所を設置しています。総合支所は、地区内の保育施設や高齢者施設も運営し、区民との協働による各地区の課題解決や地区の魅力の向上にも取り組んでいます。

江戸時代には、各藩の屋敷が置かれ、今も坂の名前や町名などに往時をしのぶことができますが、全国から人が集うまちの有り様は今も変わらず、そのご縁を生かし、各地との市民同士の交流も盛んです。

行政の立場でも、自治体同士が補い合い、高め合うことで共に栄えることを目指し、全国との交流・連携を進めています。災害時の相互支援に発展した関係もあり、連携自治体は現在229に及びます。

港区は旺盛な都市活動がもたらす負荷を軽減させるため、環境問題に積極的に取り組んでいます。その一例として、木材が二酸化炭素を固定することに着目した「みなとモデル二酸化炭素固定認証制度」があります。

全国の78の森林資源を有する自治体と協定を結び、区内大規模建築物の建主に協定自治体から産出される木材を使用することを促し、その使用量に相当する二酸化炭

素固定量を区が認証するものです。企業はこの認定を環境貢献の証しとして社会に示すことができます。都市と山間部が協働して間伐材をはじめとした国産材の活用を促進することで、林業の活性化及び低炭素社会の実現につながっています。

この他にも、全国各地の農産物や特色ある品物を販売する「全国連携マルシェ」の開催や、地域におけるお祭りやイベントに特産物の販売や名所紹介のブースを出してもらい、新たな賑わいやお互いの地域の活性化につなげています。

また、少子高齢化が進む中で子育て支援にも力を注いでいます。都会では核家族化が進み、子育ての負担も大きくなっています。故郷を離れ、身近に頼れる親や知人、両立ができるように、育児の孤立化を招かないようにと施策の充実を図ってきました。保育施設の整備や理由を問わない一時保育、医療的ケア児の集団保育、家庭訪問も取り入れた育児相談の充実、子育ての仲間づくりの場の提供などを進め、合計特殊出生率も全国平均と肩を並べる水準になりました。今年4月には、区立の児童相談所も設置しました。子どもは私達みんなの共通の宝物です。港区で生まれ育った子ども達は、立派な青年となつて全国に飛び立ち、活力を与えてくれるに違いありません。

コロナ禍でお孫さんと会えずに寂しい思いをしている方も多いと思いますが、故郷のご両親にも安心してもらえるように、これからの子どもや子育て家庭をしっかり支えてまいります。

新型コロナウイルス感染症の影響は甚大で、新しい生活様式と言われるように、世の中も大きく変化しています。対面での活動も制約されています。しかし、この間に実感することができたオンラインの利点やインターネットの活用などの経験を上手に生かしながら、全国各地との連携の力でコロナ禍を克服し、これからも「共に栄える」道を目指してまいります。

地球は、人間だけの
ものじゃないと思いました。

FUKUI HAPPINESS

福井県恐竜博物館

来る人も
住む人も
しあわせ福井

手前みそ
ですが…

富山県

立山町

273

■ 称名滝

落差 350m は日本一。春の雪解けの時期には、幻の滝といわれるハンノキ滝が現れる。滝壺に落ちる水しぶきは圧巻

大自然と歴史・文化を
感じる町 立山町



立山町は、立山連峰^{ふもと}の麓に位置し、田園風景が広がる四季の彩りが美しい町です。

立山黒部アルペンルートは全線開業50周年を迎え、山岳観光や本格的な登山、ラムサール条約登録湿原地である「弥陀ヶ原^{みだたがはら}」や「大日平^{おほひら}」の散策を楽しむことができます。また、日本一の高さを誇るアーチ式の黒部ダムは、大迫力のスケールです。

日本三霊山の一つでもある立山では、山岳信仰が受け継がれており、「布橋灌頂会^{ぬのばしかんじょうえ}」がその一つです。江戸時代に極楽浄土を願う人々が立山登山を試みていましたが、立山は女人禁制とされていました。立山へ入山することのできない女性を救済するための儀式「布橋灌頂会」は、現代では「癒やしの行事」として、復活しています。

立山町では、立山連峰からの清純な水と自然の恵みを受け、お米などの様々な農産物が生産されており、町産原材料にこだわったみそやそば等の食品、伝統ある越中瀬戸焼といった工芸品など、特産品のブランド化を進めています。

雪の大谷
4月中旬から6月中旬頃までの間、高さ20mに迫ることも
の大谷で見られる巨大な雪の壁。高さ20mに迫ることも



■ 「立山曼荼羅」吉祥坊本
(立山博物館所蔵)

国の重要有形民俗文化財である「立山信仰用具」の一つで、立山信仰の精神世界を絵画にした象徴的な文化財



■ 立山ブランド

立山がもたらす豊かな自然環境から生まれた特産品。町内産の農産物や原材料にこだわった11品目が認定されている

■ グリーンパーク吉峰
キャンプ等のアウトドアや天然温泉が楽しめる。清らかな香りが楽しめるラベンダー祭などイベントもたくさん



■ 黒部ダム

例年、6月下旬から10月中旬まで観光放水が行われる。毎秒10トン以上の水を吹き出す観光放水は迫力満点

■ 布橋灌頂会
江戸時代、女人禁制の立山へ入山できない女性を救済するため行われた儀式。現在は3年に一度行われている



■ 電動アシスト付きマウンテンバイク
(eMTB)
県内初導入。電動アシスト付きであるため、起伏に富んだ町内を快適に巡り豊かな自然を楽しむことができる



地域づくり 11月号

2021年11月1日発行 編集・発行＝一般財団法人地域活性化センター

東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話03-5202-6131(代)

<https://www.jcrd.jp/> 印刷・製本／株式会社太平印刷社

法律で許可された場合以外に本誌からの無断転載を禁止します

落丁・乱丁はお取り替えします。編集室 (03-5202-6139) E-mail: hensyuu6139@jcrd.jp まで、ご連絡下さい。



地域活性化
センターからの
メールマガジン
登録はこちら



宝くじ桜



一輪車



ドリームジャンボ
絵本



宝くじは、



図書館や動物園、学校や公園の整備をはじめ、少子高齢化対策や災害に強い街づくりまで、さまざまなかたちでみなさまの豊かな暮らしに役立っています。



救急普及啓発
広報車



遊具



移動採血車



青色回転灯
パトロール車



下水道啓発
パンフレット



自然公園案内
映像展示設備



一般財団法人日本宝くじ協会は、宝くじに関する調査研究や公益法人等が行う社会に貢献する事業への助成を行っています。



一般財団法人

日本宝くじ協会

<https://jla-takarakuji.or.jp/>



プラスワンで地域をつくる 若手公務員

地域づくり 特集編

目次

表紙裏 グラビア

- | | |
|--|---|
| <p>2~5 基調論文／大杉 寛
多彩な活躍支える条件整備を</p> <p>6~7 青森県／林 太治
リンゴだけじゃない、青森県は魚だ！</p> <p>8~9 青森県南部町／古館真美
地域での活動が想像力を豊かにする</p> <p>10~11 栃木県茂木町／爲永崇志
一般社団法人を設立して町の財源を生み出す</p> <p>12~13 新潟県胎内市／浮須崇徳
しなやかな農山村に</p> <p>14~15 福井県越前市／仲野弘修
デジタル技術で地域の課題を楽しく解決</p> <p>16~17 長野県大町市／北澤美沙
信濃大町Youthサミットを推進</p> | <p>18~19 兵庫県神戸市／村上大貴
職員それぞれのスキルを活かせる職場へ</p> <p>20~21 奈良県生駒市／和田真人
「レンタル何でもする公務員」がつくる1杯のビール</p> <p>22~23 和歌山県橋本市／海堀太郎
好きなことで地域に貢献する喜び</p> <p>24~25 島根県／中西咲貴
島根を「世界の未来」つくる震源地に</p> <p>26~27 高知県高知市／山本美咲
1人の100歩、100人の1歩</p> <p>28~29 福岡県大刀洗町／半田 遥
地域に飛び出した私が選んだ転職先は再び公務員だった</p> <p>30~33 副基調論文／井上貴至
地域づくりは楽しい</p> |
|--|---|

2021 年 11 月 1 日発行 編集・発行＝一般財団法人地域活性化センター ©2019 jcrd.jp

東京都中央区日本橋 2-3-4 日本橋プラザビル 13 階 電話 03-5202-6131 (代) <https://www.jcrd.jp/> 印刷・製本／株式会社太平印刷社

本誌は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです



プラスワンで地域をつくる若手公務員

全国各地で、公務の枠を超えて地域活動や社会貢献活動に取り組む公務員が増え、地域の新たな活力を生み出している。今回は、地域へ飛び出し活躍する若手公務員たちのプラスワンの活動を集集。



② 青森県南部町 (p8-9)
元気なお母さんたちが営む農家民泊



① 青森県 (p6-7)
漁師カード配布ポスターも自作



④ 新潟県胎内市 (p12-13)
体験プログラム「サイノカミと大雪原かんじき雪中行軍」



③ 栃木県茂木町 (p10-11)
間伐材を活用した積み木「もっくいっく」を確認する



⑥ 長野県大町市 (p16-17)
Youthサミットの打合せは毎回白熱！



⑤ 福井県越前市 (p14-15)
子ども園でのプログラミング花火



8 奈良県生駒市 (p20-21)
1杯のビールで始まるつながり。まちの人と未来を語り合う



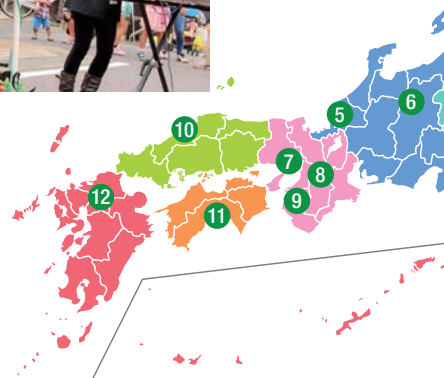
7 兵庫県神戸市 (p18-19)
民生委員活動の広報動画



10 島根県 (p24-25)
YouTubeの取材・撮影時に



9 和歌山県橋本市 (p22-23)
公務員ロックバンドの野外ライブ



12 福岡県大刀洗町 (p28-29)
多様な人と対話し、自分の道を選ぶ。キッカケはNPO法人



11 高知県高知市 (p26-27)
同世代を誘い災害ボランティア活動

多彩な活躍支える条件整備を

―地域づくり人財としての若手「プラスワン」公務員―



東京都立大学法学部教授

● 大杉 覚

「プラスワン」と相互承認

近年、地域づくりの現場で、多彩な「顔」を持ち合わせた「プラスワン」公務員の活躍が注目を集めています。

ここで「プラスワン」公務員とは、本務とは別に、社会貢献やコミュニティ活動をはじめとした地域づくりに自発的に従事する公務員を指します。本誌特集に登場する若手職員の皆さんは、さしずめ若手「プラスワン」公務員。その多彩な活躍ぶりは地域にとつての希望でしょう。

希望であるならば、もっと増えたほうがいい。より一層明るく輝き続けさせたい。そこで、「プラスワン」公務員について掘り下げて考えてみましょう。

結論を先取りすれば、相互承認がキーワードです。「プラスワン」とは、その職員本人にとって

は自発的な取り組みであるわけですが、それだけではありません。上司・同僚など役所内はもちろん、地域の人々にも理解、納得（少なくとも許容）されなければなりません。そのように広く受け入れられていることを職員本人が自覚したうえで取り組む必要があります。このような意味で、「プラスワン」は、一種の相互承認によって成立するものだと考えられます。

言い換えますと、「プラスワン」公務員の相互承認それ自体が地域づくりのプロセス（の一部）であり、かつ、地域づくりのアウトカム（の一つ）だということです。

「プラスワン」という画期的な視点

「プラスワン」が相互承認のうえに成り立つということとは、地域に暮らす以上、その一員として従事するのは当たり前だとみなされるような伝統

筆者プロフィール

大杉 覚氏

（おおすぎ・さとる）

東京大学大学院修了（博士（学術））。成城大学法学部専任講師、東京都立大学法学部助教授などを経て、現職。（一財）地域活性化センター全国地域リーダー養成塾主任講師（15年目）、自治大学校講師、世田谷区参与（せたがや自治政策研究所所長）をはじめ、国・自治体の審議会等委員など歴任。専門は、行政学、地方自治論。近著に、『コミュニティ自治の未来図』（ぎょうせい）、『これからの地方自治の教科書』（第一法規、共著）

的なコミュニティの慣習に基づく活動とは異なることを意味します。地域のしきたりで草刈りや川さらい、ゴミ当番をこなすことは、暮らしを営むうえで必要不可欠です。けれども、「プラスワン」とはいえませんが、また、役人だから当然でしよう、とか、住民に協力を求めているんだから、職員が率先してやらないでどうする、などと半ば強要される（『巻き込まれる』）のも、ここでの相互承認とは異なります。自発的でないだけではなく、公務と混同されており「プラスワン」たりえないからです。

逆に、どんなにメディアで取り上げられ、スーパー公務員^① などともはややられても、公務とはケジメをつけたうえで、地域に根ざした活動をしているのだとの周囲の了解がないかぎりには、ここという真正の「プラスワン」公務員ではありません。

自治体職員が地域に真摯に向きあえば、本務の枠に収まりきらないことはいくらでもあります。しぶしぶながら、時間外手当や代休の代償措置があるからいいだろうとお付き合ひするのが一つの選択肢。どっぷりと浸かっているうちにその面白さにのめり込んで、本務だかどうかわからなくなっているというのも一つの選択肢。就業時間外ですから、職務の矩を超えていますから、ときっぱり断ち切ってしまうのもまた一つの選択肢。

「プラスワン」公務員の「発見」は、ここに新たなもう一つの選択肢を付け加えたことに意義があります。より正確には、以前からあったかもしれないがそれを「見える化」したのだともいえません。さらにいえば、「プラスワン」公務員という

カテゴリーを新たに打ち建て、これからの公務員についてポジティブに論じるという、画期的なプロジェクトであることを強調すべきでしょう。

「プラスワン」成立のためには

5、6年ほどまえになりますが、ある自治体での若手世代向けの職員研修で、職員はいかに地域に関わるべきかをテーマにディスカッションしていたときのことです。「自治体職員であることですでに地域に貢献しているのだから、職務外でボランティアに地域に関わる必要はありません。民間の方がすればいいことです」ときっぱり述べた職員がいて仰天しました。仮にこの職員をXさんとしましょう。みなさん、Xさんの発言をどう考えるでしょうか。

Xさんは、自らの職務に誇りを持ち、責任感も強く、本務では積極的に地域にコミットしてきた方です。掛け値なく優秀な職員だと、筆者は高く評価しています。なるほど、Xさんが「プラスワン」という発想を持ちあわせていなかったのは発言から明らかです。また、Xさんの公務の捉え方に疑問がないわけではありません。と同時に、そうでなくても業務量が増え、職員定数が減らされ汲々とせざるをえないなかで、職務外の活動にまでエネルギーを振り分けている余裕はないし、それぐらいならば本務に全力を注ぎたい、こう考えていたことは間違いありません。さらに、これは憶測ですが、Xさんはちょうど家庭を築き、子育て期にさしかかろうかという年代でしたから、実際、生活面でも物理的に時間の余裕はなかったか

もしれません。

Xさんのエピソードからの示唆はといえば、仮にXさんが「プラスワン」公務員になるには、「プラスワン」という発想自体をまず知り、理解し、受容することが前提です。ただ、それだけでは不十分です。加えて、その発想を現実になり立たせるだけの環境整備も不可欠だということです。Xさんは実在の人物ですが、自治体職員の多数派代表であり、そして、おそらくこの文章を読んでいるあなた自身でもあるのではないのでしょうか。

自治体を取り組むべき環境整備

特に若手職員には「プラスワン」公務員として希望の輝きを発して欲しいものです。そこで、自治体に望みたい、制度面、実践面の条件整備について指摘しておきましょう。

第1に、地域づくり活動を兼業・副業として従事する際の許可制度を明確化することを通じて、地域づくりへの参加を支援することです。地方公務員法では、地方公務員の営利企業等従事許可制度（第38条）が定められていますが、その運用方針が明確でなかったり、実質的に禁止に近い運用をしたりする自治体が少なくありません。そのため、公務外の「プラスワン」の活動を兼業・副業として従事するインセンティブに乏しく、結果的に地域づくり活動への参加意欲が削がれてしまう面は否めません。公務外にはみ出すことを恐れ、公務そのものを萎縮して捉えがちになる一因でもあるでしょう。

神戸市の地域貢献応援制度、生駒市（奈良県）

の副業応援制度などのように、規定を整備しなおし、職員の地域での活躍の機会を支援できる制度に拡充する自治体も現れてきました。以前調査で神戸市や生駒市の担当者にお話を伺ったところでは、明確に制度を打ち出せば、兼業・副業そのものが禁じられていると思い込んでいた自治体職員の意識にも確実に変化が生じてきたとのこと。(注1)

さらには、自治体が明確な姿勢を示せば、地域の人々もガチガチに規則に縛られた公務員像という思い込みから解き放たれる効用もあります。場合によっては公務員以上に厳しい兼業規制を就業規則などで定めた民間企業もその対応を改め、それがきっかけで「プラスワン」企業人の増加につながるかもしれません。公務員も企業人も、地域において「組織内フリーランス」がごとく活躍する機会・場を少しでも持てるようになれば、地域の厚みは一層増すのではないでしょうか。(注2)

第2に、第1の点とも密接に関係しますが、いわゆるワーク・ライフ・バランスの実現です。公務などワーク外を充実させ、「プラスワン」への動機づけやその自発的な実践に乗り出すためには、物理的な時間が確保されることは最低限の要請です。連日深夜残業、休日出勤続きでは「プラスワン」はおろか、健康な日常生活を送ることすら危うい。

組み合わせながら人生を豊かに暮らすことが大事だと主張しています。(注3)

「プラスワン」がライフなのかコミュニティなのかセルフなのか、それとももう一つのワーク(副業)なのか、人それぞれですし、同じ人でもライフステージに応じた組み合わせ方がありうるということです。また、「プラスワン」であるもう一つのワークに比重を置くならば、短時間勤務や非常勤職という選択肢も当然視野に入るはず。「プラスワン」公務員とは、これら選択肢の一つだという柔軟な発想が必要でしょう。

第3に、「プラスワン」公務員の位置づけを考える「場」の確保を強くお勧めします。初任者研修など研修機会を利用し、上述の点などを含めた体系的な知識を提供・周知することはもちろん、単なる座学としてだけではなく、キャリア・デザイン研修の一環として職員間で「プラスワン」公務員についてグループ・ディスカッションしてはどうでしょう。

すでに身近に「プラスワン」公務員がいたり、職務上行動をともしたりしているようであれば、自ずと情報共有されるかもしれません。それでも意識的に「場」を確保することは重要です。そうした「場」で、経験豊富な「プラスワン」公務員に自らのキャリアを語ってもらい、その話を受けて参加者が意見交換することができれば、同じ職員同士ですので、より理解が促進され効果的です。職員同士で「プラスワン」に取り組むための自主的なルールづくりなどを議論してみるのもいいでしょう。自主的な勉強会で「場」を設けたという要望に応える支援体制を用意することも

是非考えて欲しいものです。

一歩踏み出すのにためらっている職員は多くいます。実は身近に「プラスワン」の「受け皿」がふんだんにあるのに気づかれていなかったりもします。こうした実情を踏まえた取り組みが望まれるのです。

『プラスワン』と4つの行動特性

さて、どのような「プラスワン」公務員が望まれるかは気になりますが、一義的に決めつけるわけにはいきません。多様な視角から論じられるべきテーマですが、ここでは地域づくり人財という論点に絞って考えてみましょう。

地域づくり人財は、表で示されるような4つの行動特性のブレンドでその特徴が決まると筆者は考えています。「空間(場)」と「時間(プロセス)」とそれぞれについて、「その場で・その時に」＝withinを重視するのか、「場・時を超えて」＝beyondを重視するのかで、「現場実践する人財」「伴走する人財」「越境する人財」「未来を拓く人財」という4つの行動特性が抽出されます。

これまで公務員は、いずれかといえば、「現場実践する人財」や「伴走する人財」といった行動特性が重視され、期待される職員像として求められてきました。最近では、「越境する人財」「未来を拓く人財」であることが要請されるようになってきたものの、苦手意識を持つ自治体職員も多いでしょうし、実際そのように振る舞おうとしても公務の制約で思うようにいかない現実の壁にぶつかりがち。だとすれば「プラスワン」の活動では、

表 地域づくり人財の4つの行動特性

	空間（場）	時間（プロセス）
～とともになかへ within	現場実践する人財	伴走する人財
～を乗り越えて beyond	越境する人財	未来を拓く人財

「越境する人財」ぶり、「未来を拓く人財」ぶりを
思う存分発揮してみたい手はないはずです。

行政が実現すべき価値には、効率性・経済性を重視するシグマ価値、誠実さ・公平さを旨とするシータ価値、安全性やレジリエンスに関わるラムダ価値といった3つの競合する価値群があるとされます。（注4）公務員が比較的に得意とする（はずの）「現場実践する人財」や「伴走する人財」として行動する場合であっても、昨今の厳しい財政状況のもとでは効率性・経済性といったシグマ価値が他の価値に優先されがちだったりします。仮に価値観としておおむね合致していても具体的な施策・事業では違和感を覚えることもあるでしょう。だとすれば公務では果たし得ない、実現したい価値や具体的なプロジェクトを、「プラスワン」の活動を通じて実現に努めるというバランスのとり方も考えられます。さらには、「プラスワン」と公務の双方に携わることで、シナジー効果が期待できるメリットも見逃せません。

若手「プラスワン」公務員への エール

地域づくりとは、それぞれの地域で醸成されてきた、根っこにある地域価値を再確認しつつ、そこを起点にして、これからの未来図（未来の地域価値を実現させた姿）を地域で思い描き、その実現を試みようとする、価値実現のプロセスだといえます。それだけに、未来が現場である若者世代の活躍が「出番」として認知・承認されることはとても大切です。「プラスワン」公務員とは、そうした地域における出番づくりを意識させる有力な手法なのです。

前述の小紫市長は、管理職に対して、本業をち

ゃんとしてから副業を語れと言わないようにして欲しいと伝えているそうです。筆者も、「プラスワン」などというまえに本務できちんと一人前になるのが先決だなどと揶揄すべきではないと考えます。

なぜなら、「人財」とは、ただのリソース（資源）ではなく、ギフト（才能）を持つ存在だからです。こうした発想に立てば、人それぞれの持つ能力が発揮されるべき機会や場、その活躍の広がり具合などは、多彩に想定されるのが好ましいことがわかります。相互承認さえ踏まえていれば、本務は地味でも「プラスワン」で燦然と輝いていいのです。

実践のなかでも、現実には安易に妥協することなく、「プラスワン」公務員を一人でも多くの若手職員に極めて欲しいものです。

後注

（注1）一般財団法人自治研修協会『地域創生の時代における地域コミュニティの担い手育成等に関する研究会報告書（平成30年度）』2019年、第5章1、2参照。

（注2）『組織内フリーランス』については、大杉寛『コミュニティ自治の未来図』（ぎょうせい、2021年）、第4章参照。

（注3）小紫雅史『地方公務員の新しいキャリアデザイン』（実務教育出版、2021年）。

（注4）Christopher Hood, "A public management for all seasons?", Public Administration, Vol. 69, Spring 1991, pp.10f.

リンゴだけじゃない、青森県は魚だ！ 「解体ショー」など他の追随許さぬ水産物PR―



青森県農林水産部水産局水産振興課
企画・普及グループ 技師

・林 太治

「あおもりの肴」とは

青森県は三方を海で囲まれ、陸奥湾を有しており、その海岸線は青森から東京までたどり着くほどの長さであるが、囲まれているのは海だけではなく、水産大国の北海道や三陸に挟まれ、どうにも水産県としての知名度が低い。

そして、リンゴ、ニンニクなどの強力な知名度の産品もあり、水産のイメージが弱い。北海道や三陸に品質で負けているわけではないし、むしろ消費量は全国的に見てもトップクラスである（総務省「家計調査」）。

そこで青森県の高品質な水産物の知名度向上のために立ち上げたのが「あおもりの肴」事業である。

「あおもりの肴」は「水産物を相性の良い県産品と組み合わせたPR」のほか、「漁師自らによる漁獲した水産物の店頭販売」「SNSによる情報発信」を主とした取り組みで、庁内ベンチャー

制度により、水産関係職員によって立ち上げられた。

- ・あおもりの肴フェア
- ・漁師カード
- ・ほやランプ（ホヤの殻で作ったLEDランプ）
- ・あおもりの肴盃（魚をイメージしたガラスの盃）
- ・県職員自らによる解体ショー

これらは、どれも青森県発のPRであり、私の先輩たちが生み出し、今現在受け継いできているものである。あまりにも話題が多すぎるので、すべてを語ることはできないが、ご了承願いたい。

魚屋さん？ 県職員らしからぬ 異色のパフォーマンス

まずは「あおもりの肴フェア」。漁師自らが漁獲した水産物を量販店で販売するというもので、産地の朝市を量販店に持ち込んだようなイメージである。旬の魚のほか、あまり市場に流通していない珍しい魚介が人気で、「エゾヒバリガイ」「クボガイ」など、低・未利用魚の活用も図られた。

ここがスゴイ！

「あおもりの水産業」への熱い思い

青森県農林水産部水産局水産振興課 企画・普及グループ 折野 和樹

林技師とは、2020年から職場の同僚として働いている。

彼の印象は、県外出身にもかかわらず、本県出身の私なんかよりもずっと本県の水産業を愛しているということだ。

彼は、私の職場に来る前、浜まわりの業務をしていた。慣れない方言に苦しみながらも、地元漁師と一緒にあって、地域の漁業振興のために取り組み、その熱意は周りからも評価されてきた。

今でも、以前担当した地区の漁師などから頼りにされている。

今後もこれまでの経験や人脈をいかして「あおもりの水産業」のディープな魅力を発信してくれることを期待したい。

過去4年間の売上は約3000万円に上る。

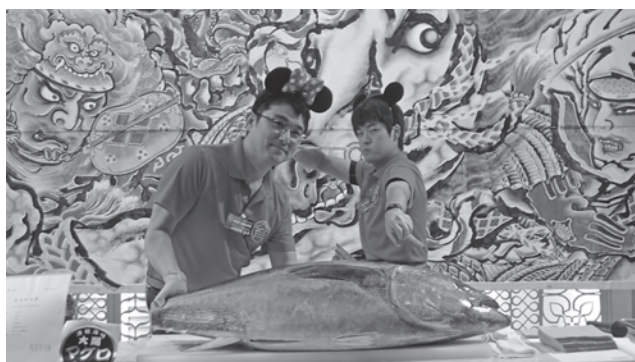
そして「解体ショー」。業務委託などはしておらず、さまざまな会場で、マグロやサーモン、アブラツノザメ等の解体ショーをわれわれ県職員が行っている。

水産技術系職員ならではの知識を生かした解説付きの解体ショーは全国的に見てもオンリーワンの取り組みであり、青森県といえば水産業、というのを強力に印象づけたはずだ。

東京はもちろん、全国各地、果てはバンコクで県職員が解体ショーを行ったのは青森県が最初である。



漁師直売！あおもりの肴フェア！



東京ディズニーリゾートでのマグロ解体ショー



漁師カードは120種類以上、現在も増加中

「持って帰っていいですか」
から始まるエトセトラ

さて、人事異動により担当課にやってきたのが木村紀昭という人物で、ここから話が大きく動く。「青森県の美味しい水産物を捕るためには鍛えられた肉体が必要」ということをPRするため、上半身裸で漁業用カップを着た漁師のポスターを制作し、解体ショー会場で掲示していたところ、結構な数の人々が「このポスター、持って帰っていいですか」と欲しがるのである。ポスターはA3で、ものすごくかさばるが、かまわないという。「これは配布しやすい形にすれば強力なPRになるのでは？」と彼が思ったのが令和元年11月頃。そこからは県職員得意のパワーポイントを駆使し、12月に完成したSNSのソーシャルゲーム風

のカードが「漁師カード」である。

何を隠そう、漁師カードは「パワーポイント」でデザイン、「普通紙」を「ラミネート」し、自らカッターでカットしただけのものである。安価……！ 圧倒的安価！

「裸エプロン漁師」というパワーワード

完成後は、あおもりの肴フェアで魚を買った方や、解体ショーに來場した方に配布するなどし、着実に笑いを取り、強力に青森県の水産業を印象づけてきたが、ある時、ツイッターで「裸エプロン漁師」という言葉が飛び出し、大いに盛り上がったのである。漁業用カップが、一般の方にはエプロンに見えるらしい。そこからは勢いが止まらず、新聞やネットはもちろん、週刊誌が漁師のグ

ラビアを撮影したいと東京から來庁。おそらく県庁でグラビア撮影を行ったのも、漁師が週刊誌一面を飾ったのも青森県が最初であろう。

全国ニュースだけではなく、全国系列のバラエティや海外放送などでも取り上げられ、その数98本とメディアへの取り上げられ方も尋常ではない。また、前述の「あおもりの肴フェア」には漁師カードを求めてたくさんの方が來場し、魚を買っていったのである。

漁師像と今後の青森の水産業

これらのことはもちろんうれしいが、重要なのは、「漁師＝怖い」から「漁師＝楽しい、ヒーロー」のイメージに変わったことである。

漁師の実像はよく知られていないらしいが、われわれからすると、シャイで楽しい人たちである。

このイメージが根付いたのが大きく、あおもりの肴フェアでは、子供や若人が漁師と記念撮影し、漁師カードにサインを貰っているのである。

水産業界は、暗い話題も多く、さらにコロナ禍でつらいことが多いと感じる毎日であるが、少しでも明るい話題をと、ほやランプなどで水産業を明るく照らしてきたところである。

先輩たちの取り組みを見ていると青森県の水産業の未来についてこう思う。

青森県産の表示を見て、「ああ、青森県の魚と言えばwww」と、つい楽しくなって、青森県の魚を選んでくれて、青森県のちよっぴり変わったPRを肴に盛り上がってくれるような、そんな面白い水産業を私も創っていききたい。

地域での活動が想像力を豊かにする —住民との関わりから広がっていく世界—



南部町交流推進課 主査 ・ 古舘 真美

父との別れ

両親が地方公務員という家庭に育った私ですが、同じ職業に就くまで、両親が地方公務員として、どのような仕事をしていたのかよく分かりませんでした。「お父さんは、どんな仕事してるの？」と聞くと、父が「今は、道路の仕事をしてるよ」と答えるのですが、勤め先は同じでも、数年ごとに違う仕事をしているといった感じで、よく分からない仕事をしている両親の職業に興味を持ったことがありますでした。

そんな私が、地方公務員を志したのは、父の死がきっかけでした。2011年2月に父が急逝、地域の方々が家まで訪ねて来てくださり、父が生前に地域に抱いていた想いや地域での活動のことを話してくださいました。おしゃべりな人でしたが、仕事や地域活動の話になると多くは語らず、ほんの一言二言。今までの父との何気ない会話のやりとりが、地域の方々のお話から、全てつなが

ったような気がしました。その頃から、父のように地域の人たちに関わる仕事がしたいと思うようになりました。

開かれた地域への道

2014年4月、南部町役場で働けることになり、晴れて地域の人たちに関わる仕事ができることになりました。私は、隣のまちの出身で、南部町には縁もゆかりもありませんでしたが、何もない状態からスタートを切れることに、とてもワクワクしていました。何もかもが初めての経験で、地域の人たちに関われるという楽しさを感じながら、たくさんの方に出会うなかで、南部町のことを何も知らない、地域の人たちとの会話についていけないという大きな壁にぶつかりました。それがとても悔しくて、仕事帰りに車で町内を隅々まで走りまわり、バス停の名前から地区名を記憶して、分からない地区は後から地図で調べるといって作業を数カ月かけて行いました。

ここがスゴイ！

古舘真美という人物について

合同会社南部とき 代表社員 根市 大樹

古舘真美という人物。見た目はおっとりしているが、なかなかタフな女性だ。

休日でもプライベートで地域活動やイベントに足を運ぶ。弊社のイベントにもほぼ顔を見せる。

しかも、担当職務とはあまり関係ないのにだ。「色んな人と顔つなぎできるし、何かしてないと時間もったいないんですよ」と平然と言い放つ。ハナの三十代。ほかにやることはないのだろうか。夏季休暇中、運転中に鹿と衝突したそう。そんな災難に遭ってもボロボロの代車で地域活動へと向かったそう。本当にタフな女性だ。

2015年4月から、南部町の地域活性化事業でもある農家民泊を担当することになりました。農家民泊は、毎年5〜9月にかけて、都市部の中高校生が修学旅行で南部町と周辺地域の農家に泊まり、2泊3日で農作業を体験します。プログラムは、2泊3日目は、先生方と一緒に宿泊先の農地を訪問する巡回があるのですが、決められた時間内に農地から農地を巡回しなければなりません。そのルートを作成する際に前年の地区巡りがとても役に立ちました。

さらに、そこで出会った達者村ホームステイ連



南部町での農家民泊の様子



親子向けイベント「サンノヘエキマエヒロバ」

絡協議会のお母さん方から、南部町のことをたくさん教えていただきました。「ちよつと家に寄って」とお声がけいただけば、休日返上で伺って、歴史や暮らし、郷土料理のこと、農家民泊でのエピソードなどを聞かせていただきました。

この時の経験から、自分自身が実際に体験してみること、自ら出向いて自身の耳で地域の人たちの話を聞くことの大切さを知りました。

協議会運営から地域活動へ

2018年4月から2年間、一般財団法人地域活性化センターに派遣になり、全国各地の地域づくりについて学ぶ機会を得ました。現在は、人口

減少対策を担当する課に所属しています。

町民と役場が一緒に移住者支援について考える南部町移住者受入協議会という会の運営を担当しているのですが、主に20〜30代の方に参加いただいています。これは、近年、南部町に子育て世代の移住が増えていると感じていること、この世代の意見や考えを聞く機会が少ないため、施策に反映できたらと考えていたからです。地域の20〜30代が何を考えて暮らしているのか、また、何を思っているのか、その取り組みに関わっているのか、それを知るためには、自分自身が実際に地域活動に参加し、相手を知ることができ、信頼関係が生まれ、はじめて見えてくることがあります。

メンバーの中には、すでに地域活動を始めている方も多く、私も休日には、役場の仕事を超えて、メンバーの活動に参加したり、お手伝いをしたりしています。その一つが、三戸駅前で開催している子ども向けのイベントです。射的やスタンプラリー、イベントののぼり子どもたち自身にイベントしてもらってワークショップなどを行っています。これまでに3回開催されましたが、

移住してきた若い親も含め、毎回多くの子どもたちが遊びに来てくれます。

年々、地域での活動と仕事との境界が曖昧になりつつあり、とても楽しく働くことができています。私は、今のよう働き方が好きなので、あまりお勧めはしませんが、本当に幸せなことだと思っています。これは、課の上司や同僚、地域の方々の理解がなければできないことだと思っているので、地域での活動に関わりながら、そこで見聞きしたことを仕事にしっかりと反映していくという循環を心掛けていきたいです。

「相手の気持ちになつて考えてみなさい」

「相手の気持ちになつて考えてみなさい」とは、働き始めて2〜3年目に上司からよく言われていた言葉です。相手から発せられた言葉や態度だけをうのみにするのではなく、何だかすんなり受け入れられなかった時こそ、相手が本当に伝えたかったことは何なのかを考え、「相手の真意を汲み取りなさい」という意味なのではないかと自分なりに理解しています。相手の立場を理解するためには、想像力を働かせることが必要で、私たちの仕事には、それが求められているということを教えていただいた気がします。これからも、相手の気持ちになって考える力を磨くため、積極的に地域の人たちと関わり続けていきたいと思っています。

※今回は、地域活動の内容については詳しく記載しませんでした。もし、気になる方がいらっしやいましたら、ご連絡ください。

一般社団法人を設立して

町の財源を生み出す

— 20年後の子どもたちに住みよい環境を創るため —



茂木町役場建設課管理係主査
一般社団法人 Social Up Motegi 代表理事

・ 爲永 崇志

茂木町で生まれ育った子どもたちが、地元に着を感じ、誇りに思えるようなまちづくりを進めていきたい！ そんな思いから、2020年4月に一般社団法人 Social Up Motegi を設立しました。

Social Up Motegi は、こわゆる地域商社の活動形態で、茂木町にある山林、農畜産物などの地域資源のブランド化をプロデュース、地域内外に販売しています。

間伐材活用の積み木の販路拡大

茂木町は土地面積の65%が山林で、木材が豊富な土地です。町内では、森林を守るために木を伐採する「間伐」が行われていますが、間伐した木が捨て置かれることや、安い値で市場に出ていることも……。間伐材をうまく活用できないだろうか。付加価値を付けて商品化できないか。

そんな考えを巡らせている時に、既に商品化さ

れていた「もつくいっく」という積み木の商品が目にとまりました。「木育」という言葉が由来の「もつくいっく」は、ヒノキの自然な香りが特徴的で、茂木町で伝統の技を受け継ぐ木工職人が制作した商品です。私たちは「もつくいっく」を多くの手に取ってもらえるように、パッケージをリニューアル。さらに「道の駅もてぎ」「自社Webサイト」、ネットショップ「BASE」など、さまざまな場所で購入できるように販路拡大を行っています。

その他にも、間伐材を使用した幼児用の椅子「もつくいっく」のプロデュース、販売、地元事業者がプロデュースした「ログトーチ」などの販売も手がけています。

放牧黒毛和牛のブランドディング

茂木町で畜産農家を営む「瀬尾ファーム」の黒

リーダーシップにたけた生粋の茂木人

一般社団法人 Social Up Motegi 理事
栃木県茂木町役場総務課庶務係 主査 東海林 帆

爲永代表とは2019年から始まった地方創生勉強会でともに学びました。当時、爲永代表は企画課職員で勉強会を担当し、内容や日程の調整、勉強会のファシリテーションをしていました。爲永代表は生まれも育ちも茂木町で生粋の茂木人。職員からの信頼が厚く、リーダーシップにたけ、何事にも臆することのない人柄で、社団法人を立ち上げる際には、代表理事の適任者でありました。地域商社事業は役場業務外の活動で時間に制約があるなど前途多難ですが、爲永代表のリーダーシップのもと、社員・理事一同、助け合って頑張っていきたいです。

毛和牛をブランド化するために、クラウドファンディングを実施しました。

瀬尾ファームは、海上自衛隊を早期退職した瀬尾さんが夫婦で始めた牧場です。耕作放棄地に牛を放牧し、計8・1ヘクタール（東京ドーム1・5個分）の土地を再生へと導きました。

クラウドファンディングでは、「瀬尾ファーム」で育った牛を東京の市場には出荷せず、栃木県内で取引先を見つけて商品化することに挑戦。目標金額を集めることに成功しました。

「もてぎ放牧黒毛和牛」のブランド化に向けた



Social Up Motegi

地域資源のブランディングロゴマーク



設立総会で議長を務める為永代表

PRと言いますか、第一歩を踏み出すためのプロデュースだったと考えています。

◆ ◆ ◆ メンバー全員が公務員の団体誕生

Social Up Motegiを設立したきっかけは、地方創生の勉強会に参加したときでした。町役場の若手・中堅職員が有志で集まり、「茂木町で何ができるのか」と、考える機会がありました。

参加者とも何度も考え、意見を出し合う中で、「まちのために何かやろうー」という想いが、少しずつ強くなっていきまして……。

もちろん町役場の職員として活動することは可能でしたが、より自分たちで主体的に活動できる環境を整えたい気持ちから、勉強会の参加者と共にSocial Up Motegiを設立。

こうして、メンバー全員が公務員の団体が誕生しました。

Social Up Motegiは、「20年後の子どもたちにとって住みよいまち、大学や仕事で地元を離れても茂木町を好きでいてくれ、誇りに思ってくれるようなまちをつくっていかう」と、活動しています。

漠然としていますが、私は「かっこいい田舎」をイメージしています。

例えば、里山でも草が伸び放題だと格好がつかないと思うので、ある程度整備してきれいにしたり、アウトドアで活用したり。「田舎だから嫌だな」ではなく、「頑張ってるから好きだよ」と思ってもらえるような、そんなイメージです。イメージは法人の公式インスタグラムをみてください！そして

で、かっこいい茂木町のイメージをタグ付けして一緒に盛り上げてください(笑)。

2021年から茂木町で「もてぎの森林からの贈り物事業」が始まりました。これは、茂木町で生まれた子どもたちに、茂木町の豊富な森林資源で作られた椅子「もっくいっす」と積み木「もっくいっく」をプレゼントする取り組みで、木が好きな人を育てる「木育」の一環です。また、木の香りやさわり心地を親とともに体験することで「木」のファンを増やし、地元の木工業者の活性化につなげていくことも視野にいられています。

この町を好きになるきっかけを作ろうと、私たちもアイデアを出し、商品の販売やPR活動に関わっています。少しずつではありますが、「かっこいい田舎」をイメージしながら活動を続けています。

◆ ◆ ◆ 子どもたちが誇りに思いつまちに

子どもたちのために住みよいまちを創ることが、私たちの目的です。

子どもたちが茂木町に残らずとも、茂木町を好きでいてくれて、自分のふるさとであると認識し、誇りに思ってもらえるようにする。

そのために、地域資源を活用した商品を開発・販売し、外貨を稼ぎ、まちの財源を獲得することで茂木町が茂木町として持続することができるよう活動していきたいと考えています。

今後も自由な発想で同じ志や想いを持つ仲間と、茂木町の子どもたちや、町のためになることを話し合い、実行に移していきます。

しなやかな農山村に ―協力隊とともに取り組む地域づくり―



胎内市教育委員会学校教育課
NPO法人ヨリシロ共同代表理事

・ 浮須 崇徳

人口減少が進行する新潟県胎内市。他の市町村同様、さまざまな地域課題も累積しています。未来に明るい話題ばかりでは決してありません。でも、ここに暮らす人々は未来に悲観することなく、いろんな課題にしなやかに向き合いながら、何だかんだ、楽しく暮らしています。

私たちは、ここに暮らす人々の数は減っていったとしても、いきいきと暮らす地域住民が残ри、そうした住民らによりふるさとが守られていくことが大切だと考えています。

そんな思いとともに、仲間たちと3年前につくったのが、NPO法人ヨリシロという、まちづくり会社です。

メンバーは私の他に、地域おこし協力隊のOB・OGや音楽サービスを提供している都内のベンチャー企業の会社員といった面々です。

◆◆◆ 複層的で継続的な関係性の創出

私たちの法人のミッションは二つ。

一つ目は「人と地方の複層的で継続的な関係性の創出」です。人と地方の関係は「住む／住まない」の2極ではなく、観光、特産品の購入といったものから、集落行事への参加、何らかのプロジェクト等課題解決への参画まで多様な関係性があるとされています。私たちはこの多様な関係性をたくさん作っていききたい。

それはなぜか。地域の外との交流によって、ここに暮らす人々自身が自分たちの地域の良さに気づき、誇りをもつきっかけになると考えているからです。

地域住民の地域への誇りは、これからの人口減少時代において、変革のエネルギーになると考えています。

◆◆◆ 地方におけるチャレンジを支援

二つ目のミッションは「地方におけるチャレンジの支援」です。

さまざまな課題が山積する胎内市。でも、近年

ここがスゴイ！

ロジックとパッションの人

NPO 法人ヨリシロ 共同代表理事 神田 圭奈

私が地域おこし協力隊だったときの市役所の担当だった浮須さん。私の知らない横文字をよく使う意識高い系の人（笑）。

今は同じ会社の仲間になりましたね。いろんなプロジェクトと一緒に取り組み、色々なことを手探りしながら、ともにたくさんのことを学んでこれましたね。

浮須さんのアツアツな胎内市への「好き」の気持ち。そんな気持ちが周りの人を自然と動かしているのだろうと日々思います。

これからもヨリシロのミッションを軸に、自分たちが楽しいと思える活動と一緒に頑張っていきましょう！

ではそうした課題に対しビジネス的な持続性をもつて解決を図る取り組みに挑戦する動きが見られはじめました。

私たちは、胎内市でこうした取り組みにチャレンジする人や組織を支援していきたくと考えています。

二つのミッションの具体的な事業については、ヨリシロのホームページ (<https://www.yorishiro.org>) をご覧いただけたらと思います。

◆◆◆ 暮らしを価値に



ヨリシロのメンバー



MURA-ASOBI のWEB ページ

私たちの取り組みで代表的なものをひとつご紹介したいと思います。

「MURA-ASOBI」というプロジェクトです。このプロジェクトは、農山村の「暮らし」を胎内市に訪れる観光客等に体験プログラムとして販売するものです。

名勝地巡りといった観光よりも、もう少しだけ私たちの暮らしに踏み込んでもらい、濃密な地域体験をしていただきます。

少しだけ売れ筋を紹介すると、さいの神、田植え・稲刈りといった私たちにとつての日常を商品化したものは人気があります。また、胎内市は山川海と自然が豊かなのですが、地元の人たちが普段から楽しんでいる楽しみ方は人気があります。

私たちのプログラムを楽しんでくれるお客様は、体験料を支払ってくれるだけでなく、体験を

通じて、私たちの地域（住民）の暮らしを褒めてくれます。

やりがい、なりわいの両面で地域が元気になる——そうした狙いでプロジェクトに取り組んでいます。

令和2年度は、私たちが関わったプログラムによって約2300人の方たちに胎内市を訪れていただきました。

◆◆◆ プラスワンって実際どう？

NPOの設立に至った経緯については、長くなるので割愛します。私はnoteでブログも書いていてそこでつづらせてもらっていますので、良かったら読んでみてください。アカウント名は「うきすたかのり」です。

今回は、「プラスワン活動
をなぜやっているのか？」今の率直な感想を書きたいと思っています。

「報酬のため」ではありません。私は無報酬の役員です。「使命感」だけではありません。自分の暮らしているまちへの危機感はもちろんあって、公務以外でも貢献したいという思いはありますが、それだけでここまで時間とエネルギーを投じるほど使命感に駆られているわけではありません。

「部活みたいで楽しいから」という答えが今は一番しっくりきています。仕事が終わった後、仲間と集まって、あれやこれやと打ち合わせをする。タスクを期限までにこなしたり、スキルを磨いたりする。自分たちなりにロジックを組み立てて事業を展開する。ノウハウが蓄積され、うまくいけば利益が出て、機材を購入したり、アプリケーションを導入したりして、会社として少しずつできることが増えていく。

活動していて、部活みたいだなと思うことがよくあります。楽しさは私達が「自分ごと」として活動を持続させる上で大切な要素となっています。

◆◆◆ 地域は僕らの学びの場だ

最後に今後の展望を少し。

かつて本業である市職員として関わっていたもので、現在は新型コロナウイルス感染症の影響もあり、実施できていない取り組みに、NPOとして改めて挑戦してみたいと思っています。それは、「地域課題」と「若者」を「学び」を通じてつなげる課題解決型の地域留学です。受入地域側は懸案であった課題の解決が図られ、若者は課題の現場で実践的な課題解決力を育みます。地域課題を課題のままにせず、挑戦の機会にすることで、地域と若者が共に育み合う、そんな関係性が生まれていくのではないかと考えています。

この地域留学も含め、私たちが創出する人と地方の多様な関係性の反復・継続・循環によって、まちの持続可能性の向上に少しでも寄与していけたら嬉しいです。

デジタル技術で地域の課題を楽しく解決 —子どもたちに好奇心と想像力を—



越前市産業環境部産業政策課主幹
越前市ぶらぶらぼ所長

・仲野 弘修

プログラミング花火

「ボールをなげたら、はなびがあがった!」「ふしぎ! まほうみたい!」

子どもたちが壁に向かってボールを投げると、壁一面にたくさんの花火が……。次々に打ち上がる色とりどりの花火に「たのしい!」「きれい!」と子どもたちの歓声が上がります。これはデジタル技術を活用した「プログラミング花火」の様子です。投げたボールをセンサーが感知し、プロジェクターが壁に花火を映し出すという仕組みです。私たち「越前市ぶらぶらぼ」は、この取り組みを地元の幼稚園などで実施し、昨年は1年間で14カ所、約900人が体験しました。

きっかけは市民の疑問の声

「このゴミ、何ゴミですか?」「ゴミの捨てる日がいっただったか教えて」

今から8年前の2013年のこと、私は行政に

寄せられるこうした声に直接答えることができないかと考えていました。目に留まったのは、新聞などで紹介されていた「オープンデータ」。そこでプログラミングの勉強を開始し、本で調べたりインターネットで調べたりしながら、ゴミ分別アプリ「越前市ゴミチェッカー」の原型を完成させました。周りの人たちに実際に使ってもらったりSNSで感想を聞いたりすると、「レイアウトをこう変えてみたら」「このロゴを使って」などの提案や協力をしてくれるプログラマーやデザイナーの人が出てきました。私たち越前市ぶらぶらぼは、「デジタル技術で地域の課題を楽しく解決する」ことを目指す市民団体で、市職員や企業SEなどが集まり、2013年に結成しました。

コロナで花火大会中止「さみしい」

新型コロナの影響で暮らしは一変しました。外遊びが減ったり、いろいろなイベントが中止にな

きらめく花火のものは、 優しさそのもの

日本ボルガラー協会 ボルガチョフ
越前市役所 市民福祉部 社会福祉課 主査 波多野 翼

越前市役所は、仲野さんをはじめ多くの若手職員が自分たちの特技や個性を活かしてまちづくり活動を行っています。そして、仲野さんの活動は、毎回子どもたちの歓喜の声と笑顔であふれています。

「コロナ禍で花火が見られない子どもたちに花火を見せてあげたい」という優しい思いをプログラミングで実現させた仲野さん。子どもたちの笑顔は、その優しさを子どもたちが感じ取った証拠だと私は思っています。これからもその優しさとプログラミングでたくさんの人の笑顔を作っていく仲野さんらしい活動を楽しみにしています。

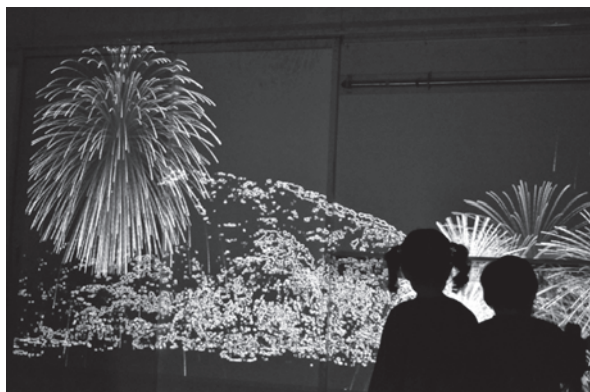
ここがスゴイ!

つたりと、私の娘たちも自宅で過ごす時間が増えました。特に花火大会の中止を娘たちはさみしがっていました。そこで私は、花火気分が味わえるプログラムの製作に取りかかりました。完成したものを娘たちにやってもらったら大好評。ならば、より多くの子どもたちに楽しんでもらえればと、地元の幼稚園の協力を得てプログラミング花火大会を開くことになりました。

この幼稚園での様子がメディアに取り上げられました。すると、「コロナで園外での遊びや活動が制限されて……」「子どもたちに新しい楽しみ



ゴミチッカーの Web サイト



ボールを投げて「ドーン！」子ども園でのプログラミング花火の様子



オープンデータユースケースコンテストで優秀アプローチ賞を受賞

このようにたくさんの人とつながり、子どもたちと関わっていることは、私の大きな喜びです。

今後もデジタル技術を活用し、すべての子どもたちが「たのしい」「ふしぎ」「へえー！」「びっくりぎょうてん！」と感動を持って帰れる場を作っていきたいと考えています。そしてこの経験が子どもたちの好奇心や想像力を育むことにつながれば嬉しいです。

たくさんの人のアイデアで進化

「今日はみんながいつも使っているこの部屋を、魔法の部屋にしました！」「この魔法のボールで花火を打ち上げたいと思います！」子どもたちがワクワクするイベントを園の先生たちと作り上げます。「たのしい！」「なんで？」「がんばれー！」と夢中になってボールを投げる子、目を輝かせてじっと見つめる子、友達を応援する子など、子どもたちは思い思いに楽しんでくれます。保護者からも「ボールを投げるまねをして、楽しそうに話をしてくれました」とうれしい声を聞くことができました。

さらにたくさんの人のアイデアでプログラミング花火は進化していきました。

例えば、地元のかこさとしふるさと絵本館「研」では、かこさとしさんの絵本の場面を追体

験できるプログラミング花火を行いました。絵本の世界をデジタル技術を使って表現したことに「びっくりぎょうてん！」「絵本の中にいる感じがして楽しかった！」と子どもたちは大喜びしていました。

また、ある特別支援学校から「自分の体を自分の意志でなかなか動かせない子どもたちに、何か光のコンテンツを作ってもらえませんか」と相談がありました。製作に3カ月かかりましたが、自らのちよつとした動きに反応して、様々な変化を楽しむことができるデジタルアートが完成しました。障がいのある子どもたちは、壁に向かって手を振ったり、床に寝転がったりして映し出される花火や花を目で追ったり、映像に合わせて声を上げたりしていました。先生たちからは「体験の幅が広がりました。子どもたちは何かを感じ取ったようです」との声を聞くことができました。私は

こうした「思ってもみない」ことが子どもたちの間に起こっていることに、驚きとうれしさを感じました。

すべての子どもが感動を持って帰る

また別の特別支援学校で実施した時のことです。広いホールを暗くして準備をしていると、「何してるの？」と子どもたちが不思議そうに寄ってきます。「いいことがあるよ」と伝えると笑顔になって教室に戻っていきます。よほど楽しみなのか、何度も行ったり来たり。大盛り上がりした後、先生からは「集団活動に参加しにくい子、見通しの持てないことに不安を持つ子などさまざまな中で、どの子も一人残らず楽しそうにボールを投げる姿を見ることができたことが何よりも嬉しかったです」とお礼の言葉をもらいました。

信濃大町 Youth サミットを推進

—主体的にかかわる姿勢を大事に—

大町市総務部まちづくり交流課
定住促進係主事

● 北澤 美沙

すべては職員提案から始まった

みなさんの職場にも「職員提案」という制度があるかもしれません。大町市の職員提案とは行政効率や市民サービスの向上を目的に職員が市に対し何かしらの提案をしやすいというものです。

今から7年前、入庁2年目の私は、子育て支援課に配属され、目の前にある仕事をこなしていく毎日を送っていました。そんなある日、「職員提案を若手職員でしてみない？」と先輩職員からの一言。普段の私なら面倒くさいが勝って流していただろうその一言に、なぜかその時は「え、なんか面白そう」と思い、職員提案の作戦会議に参加しました。

業務終了後に行われた作戦会議には、入庁10年以下の職員が10人程度集まっており、日頃感じている「こうだったらいいの」を共有し合い、やってみたいことや改善したいことを案として出していました。

その中で私が提案したのが「おおまち若者会議」。

2013年6月に「信州若者1000人会議」が開かれ、若者が集まって地域への想いを共有する場が注目されていた時期でもあり、大町市でもやってみたいと漠然と思ったのが提案のきっかけでした。当時、20代から30代の若者が集まって、まちの話をする機会がなかったため、自分が住んでいるまちのことを考え、共有する一日があってもいいんじゃないかという想いを作戦会議で伝えるところ、思いのほか賛同してくれる職員が多く、「おおまち若者会議」を軸に職員提案を考えることになりました。

◆ ◆ ◆
渋谷の1000人会議に参加

結局、その提案は採用されませんでした。具体的な取り組みについてさらに研究を」とのご意見をいただき、2014年6月に渋谷で開催された「信州若者1000人会議」に参加することになりました。

変幻自在のスポンジ笑顔

大町市民生部福祉課 小日向 勲

北澤美沙さんは、とにかく明るい笑顔で行動する人だ。真顔でいると、どこか調子が悪いのかと心配になる。ある日、「ところで美沙さんってどういう職員になりたいの？」と尋ねた。美沙さんは「わかんない」と、やはり笑顔で答えた。その笑顔は「スポンジみたい」だった。スポンジは形を変えられる。「私はこの形だから、この形しか受け入れられません」とかではなく、いつも笑顔でどんな人ともつながり、気づきが多い。今の仕事の先に、どんな形に変化するのか。変幻自在のスポンジ笑顔の行動を、これからも楽しみにしています！

ここがスゴイ！

参加してみると、地元愛溢れる若者の存在やま

ちの将来を想いアイデアを出し合っている姿を目の当たりにし、より若者会議開催に向けて熱が高まったことを覚えています。また、実際に参加してみると、交流しやすいプログラムのアイデアや会場設営の仕方、運営の方法など参考になる部分が非常に多く、研究しに行った甲斐がありました。

◆ ◆ ◆
言い出しつpegがリーダーに

「信州若者1000人会議」でもらった熱を勢いに、若者会議に参加した半年後の12月に大町で

開催するという目標を立て、若手職員有志数人が中心となり計画を始まりました。リーダーは言い出しっぱなしという事になり、進め方も分からない頼りない私がリーダーとなってしまいました。

業務終了後に何度も集まり、急ピッチで計画を進めていきました。開催まで半年を切ったところからスタートという無謀な計画だったにも関わらず、ありがたいことに参画してくれる職員数も増えていきました。同時に、若者会議の開催というゴールは同じだけれども考え方の違いでメンバー同士がぶつかり合うこともあり、合意形成の作業がとても大変でした。私の性格上、いろんな意見に右往左往してしまい、みんなに「どうしよう!」と相談しながら進めていったなあと思ひしい思い出です。

◆ ◆ ◆ お金がない!

「首都圏に住んでいる学生にも参加してほしいから新宿からバスを出そう!」「参加者100人を目指そう!」とやりたいことが膨らむ中、一番の壁はお金の問題でした。開催日まで半年を切った状況で、助成金や補助金を申請するのは厳しかったので、市内の企業を回って協賛金集めを行いました。企業回りをした経験もなかったので、緊張しながら一社ずつ回ってイベントの趣旨を説明し協賛をお願いをしました。厳しい声ももちろんあったのですが、普段の業務では関わらない地域の方の声も直接聞くことができ、とても勉強になる日々でした。市の若手職員が地域を盛り上げるために行動を起こしていることが嬉しいと温かい

言葉をかけていただけのこともあり、期待を裏切りたくない頑張るエネルギーにもなりました。協賛回りの結果、当初予定していた額の3倍もの協賛金が集まり、新宿から大町までのバスも無事用意することができました。

◆ ◆ ◆ 人と人とのつながりから生まれること

「おおまち若者会議」改め「信濃大町 Youth サミット」当日。全国から85人の方が参加し、大町市内で活躍しているゲストスピーカーの刺激的なお話や参加者が大町のことを考えるワークシヨップなど白熱の5時間となりました。普段接点のなかった人同士が、若者会議を通じて顔見知りになっていく様子や若い世代の参加者が大町を元気にするために意見している様子を見たときに、準備の大変さがふつとびました。また、ワークシヨップで出た課題にアイデアが集まり、「信濃大町 Youth サミット」終了後に団体を発足させたグループもありました。

そして、若者のパワーを実感した私たちは、2年後にもう一度開催しようと動き始めました。せっかく芽が出たつながりや取り組みに熱を吹き込



「信濃大町 Youth サミット」を作り上げたメンバー



「信州若者 1000 人会議」に出席していた阿部守一長野県知事と

む機会にしようと、2回目は2016年12月に実施し、その後は、市の事業で同じような場づくりを実施しています。

現在、私は入庁9年目となり、移住・定住の部署で勤務しています。若者会議で培った関係が業務につながることも多々ありますし、苦労を共にした仲間が今、市役所内にちらばっていることも心強く感じています。今後も主体的に関わっていく姿勢を大事に、大町市を盛り上げていくために奮闘していきたいと思っています。

「信濃大町 Youth サミット」当日の様子が Web マガジン「greenz.jp」に掲載されていますので、ぜひご覧ください。

<https://greenz.jp/2015/01/24/oomachi-youth-summit/>



Web マガジン「greenz」の QRコード

職員それぞれのスキルを活かせる職場へ ―本業の傍ら、別部署やNPOのPRも―



神戸市文化スポーツ局スポーツ企画課

・村上 大貴

現在、私は文化スポーツ局スポーツ企画課の仕事をこなす傍ら、庁内の別部署・NPO法人・プライベートそれぞれで、神戸市の魅力を発信するPR動画制作を行っています。動画制作のスキルは大学のサークル活動で習得したもので、学生時代は自主映画制作やミュージックビデオの作成等を行っていました。ただ入庁当初は、動画制作のスキルを仕事に活かそうとは考えていませんでした。

転機は入庁2年目の2018年、長野県小諸市の職員自らが企画・撮影・編集を手がけ、大きな反響を呼んだPR動画（YouTube「小諸市PR動画第1弾 小諸がアツ・イー！ 本篇」）を目にしたことです。「公務員×動画制作は重宝される」と確信した私は、動画制作の経験があり、機会があれば動画を作りたいということを職場の友人等に伝えていました。

民生委員の仕事若者にPR

初めて動画制作を仕事で活用したのは2018年末頃です。私は区役所で民生委員活動に関わる事務局職員の仕事を担当していましたが、民生委員の存在が若年層に認知されていないことが、全体的な課題として認識されていました。そこで、若年層向けに民生委員の仕事内容を紹介する動画を作成してくれないかと、本庁の職員から私に依頼が舞い込みました。私は職員をYouTubeとして出演させ、なるべく簡単な言葉で民生委員の概要を説明する動画を作ろうと提案しました。

しかし、当時は職員自らがYouTubeとして撮影・出演・編集し、制度紹介をすることは庁内初の試みであり、抵抗感を示す方も少なからずいました。

有志の職員で結成した動画制作チームの協力もあって何とか動画を公開できたものの、反響はそれほど大きくはなく、私の動画制作スキルは、庁内にはあまり認知されませんでした。

通常業務では中々経験できない、前例無きことを行う際の庁内調整の難しさ、成果をアピールす

ここがスゴイ！

変幻自在の動画生むスキル

神戸市経済観光局経済政策課担当係長 長井 伸晃

村上くんとは職場の外で出会ったことがきっかけで、立ち上げたNPO活動を紹介する動画制作に力を貸してもらいました。活動内容によって動画のテイストを変幻自在に変え、求めていたクオリティ以上の動画を仕上げてくれました。

彼のような優れたスキルを「実は持っている」公務員が、胸を張って職場・組織で自分のスキルを活かせるようになっていけば、多様な社会課題にもスピード感をもって柔軟に対応できるような行政になっていくのではないかと思います。

ることの重要性を痛感した仕事でした。

プラスと確信したら 多少の反対は恐れずに

その後、神戸市は2019年に自治体初の職員採用枠として「デザイン・クリエイティブ枠」を創設したり、2020年11月にはSNS運用や動画の企画、写真撮影等を担う副業人材の業務を開始するなど、クリエイティブな専門人材の雇用を進めていきました。更には新型コロナウイルスの流行により、オンラインでのイベント、説明の需要が急激に高まりました。

「動画制作のスキルを活かすのは今がベスト」そう感じた私は、この機を逃してはならないと、



NPO 法人 Unknown Kobe の広報動画



キッチンカー事業広報動画



淡河町 PR 動画

動画制作の実績・スキルをさまざまな場で口に出すようにしました。他人から声がかかるのを待つ程の余裕は、私にはありませんでした。

結果、しつこい宣伝が功を奏し、NPO 法人 Unknown Kobe の広報動画、都市計画課のキッチンカー事業の動画作成、新型コロナウイルスの啓発動画作成等の機会を得ました。現在は神戸市北区淡河町のPR動画を有志の職員で制作しています。

これらの動画制作についても決して順風満帆という訳ではなく、自分の行動が果たして正しいことなのかと何回も自問自答を繰り返しました。ただ、個人的には、熟考を重ねた上で自治体にとってプラスになると確信したことは、多少の反論が

あろうとやり遂げるべきだと思います。ただし、想定以上の反論があれば、自分の考え方が間違っていないのか再考した方がいいです。

◆◆◆ 当面の目標はBUZZMAFF越え

BUZZMAFF（バズマフ）は2019年に設立された農林水産省の公式YouTubeチャンネルです。大臣会見を方言でアフレコするなど斬新な企画を行い、SNS等でその名のとおり「バズって」います。私もSNSで存在を知ったのですが、面白いと思うと同時に「してやられた」と悔しい思いをしたことを覚えています。BUZZMAFFは農林水産物等の良さを親しみやすい作

風で発信していますが、私は神戸市職員として神戸市の魅力をあらゆる角度から発信し、BUZZMAFFを超える反響を呼ぶ動画を作成することを目指しています。そしてBUZZMAFFとコラボできればと思います。

◆◆◆ 職員のスキルを最大限に発揮できる仕組みづくりを

私は、さまざまな場で自分を売り込んだ結果、動画制作の機会をいただくことができました。しかし、その機会は、私の思いをくんでくれて、かつ庁内の調整能力が高い職員にたまたま見つけてもらえたから生まれたものです。要するに運が良かったのです。

私はこの「運の要素」を排除したいと考えています。これを達成するには組織にとって有益かつ他の職員では代替できないスキルを持つていれば、そのスキルが自らの担当業務と関係なくとも活用できる仕組みを整える必要があります。これが実現すれば、組織・スキルを持った職員の双方がwin-winの関係になれると考えます。

この記事を読んでいる自治体職員の方々の中には、自身の能力を十分に発揮できずくすぶっている方もおられると思います。そういった方々のためにも神戸市から流れを変えていけないか。そう思い、今後も行動・提案を続けていく所存です。「職員それぞれが最大限に自身の能力を発揮できる職場を作る」これが動画制作をきっかけに見出した私の新たな目標です。

「レンタル何でもする公務員」が つくる1杯のビール —多くの笑顔が集まる場所を求めて—



生駒市地域活力創生部
市民活動推進課主幹

・和田 真人

人生の転機「e g a o 家」

私は愛知県豊明市役所に18年間勤務していました。14年ほど経ったある日、空き店舗の増加を憂慮し、プライベート活動として空き店舗の活性化プロジェクトの立ち上げに参画しました。商店街や自治会、大学の方々と空き店舗の一室を借りて、多くの笑顔が集まる場所との願いを込めて「e g a o 家」と命名しました。普段は、まちの人たちが「Ida y mas t a r」となって、1杯のコーヒーで多くの人とつながるサロンや飲みニケーション、大学生が企画立案し実行するイベントなどを行っていました。e g a o 家での活動も3年目に入った頃に、このような場所を継続的に今後を増やしていくために、本格的に金と人が回るNPOのような組織化をしたいと考えるようになりました。ちょうどその頃、職員の副業で先進的な

生駒市を知り、ここなら職員をしながらプライベート活動をさらに発展できると考え転職するに至りました。

失敗の連続の日々

転職当初は失敗の連続でした。先進的な生駒市ですぐに多くの人と活動できると思っていたら、世の中そんなに甘くはありませんでした。個人的に、幼稚園と老人ホームの合体形のような多世代交流の場を創ることを長年考えていましたが、「それはいいことだね……」と周囲の反応は薄かったのです。ある意味、私自身がe g a o 家の成功体験を引きずっていたのだと思います。よそ者がいきなり生駒に来て何も形にできていない中で、周りからは様子見される状態でした。まちづくりの経験を踏まえた社会人採用枠でしたので、自分の中に結果を出さなければならないという焦りもある

ここがスゴイ！

つべこべ言う前にやってみせる

生駒市市民活動推進課 白川 徹

和田主幹のスゴイところは何事にも挑戦する「意欲」と、とにかくやってみるその「行動力」だと思います。私が直属の部下として仕事やプライベートの活動について相談しているときも、常に前向きで“できない理由”を口にする姿を見たことはありません。どうすればできるかを考え、つべこべ言う前にまずはやってみよう、と率先して次の行動を取ってくださいます。まさにプラスワンで地域をつくる（若手）公務員を象徴する人物であり、自信を持って推薦します。

ったのだと思います。そんな時に、「レンタルなんもしない人」という書籍を読みました。単純に面白そうという感情と行動することの重要性を感じました。

「レンタル何でもする公務員」で 経験値急増

初心に帰り、生駒をゼロから知るいわゆるマーケティングをしようと考えました。まちには何があり、どんな所でどういう人がいるのか。そこで前述のレンタルと掛け合わせ、フェイスブックに「レンタル何でもする公務員」と題し、無料で何でもするので私をレンタルしてくださいという募集投稿をしました。最初は実用的な畑や空き家の改装の手伝いなどでした。また、楽団の裏方のレンタ



egao 家での「昼から飲みニケーション」



筆者が考える多世代交流の原型（実家にて両親と子どもたち）



焚き火を囲みながらビールを飲むだけの「みんなで何もしない bar」

今ではプレゼンを楽しめるようになりました。勉強会にも数多く参加し、自分でも企画し多くの人と有意義な時間を過ごすことができました。千里の道も一歩からではありませんが、今後も多くの人と飲みニケーションでつながりながら、明るい豊かな社会を創っていききたいと思っています。

なぜビールづくりなのか

そして現在副業としてクラフトビールづくりを計画し、ビールづくりの研修を受けています。今までの活動を通じて、大切にしている先祖代々の土地をどのように活かすか（耕作放棄地の活用）

ル依頼で行ったら、総勢60名ほどの楽器奏者とともに『栄光の架橋』を歌わせて頂けることになり、予想外の展開を楽しんだ経験もあります。その他には、旅館の女将さんからテラスを作ったので場を創って欲しいとレンタルして頂き、単にたき火をみんなで囲みながらビールを飲むだけという「みんなで何もしない bar」を開催しました。レンタル何でもする公務員の活動で得られたものは、まさに経験に勝るものはないということです。まちの人たちと対話を通じて、私の経験値はドラゴンクエストのゲームのようにどんどん上がり、次にすべきことが自然と見えてくるようになりました。

視点）、空き家にいかに新たな息を吹き込むか（今後ますます増加する空き家の利活用の視点）、活動の資金を補助金に頼らずにいかに持続性を持つて捻出するか（まちづくりのソーシャルビジネス的視点）ということに思考が移りました。つまり、まちの畑で大麦やホップを育て、リノベーションしたまちの空き家で醸造し、まちの人たちと未来に向けて行動するという視点です。これらの考えと egao 家での飲みニケーションがいつも楽しかったこと、単に私がビール好きで自分自身が楽しいと思えること、そして最後に現役時代には毎日大瓶1本を飲んでいた父が、年齢的にグラス1杯くらいしか飲めなくなり、息子がつくったビールで最後の親孝行として父と乾杯をしたこと。つまり、飲みニケーションのような楽しく、お互

明るい豊かな社会を創る

人口減少の日本、AIで発展する世界。想像を絶する速さでイノベーションは起こり、時代が今まで以上に大きく変わることは周知の事実です。しかしながらそのような中でも、人間同士のつながりが消えることはありません。今まで小さい頃から人の後ろをずっと付いて行っていた私が、ここまで成長できたのは、関わってくれた多くの方々のおかげです。人前で話す時は、声が震え赤面していましたが、

いが尊敬しあえる建設的な場を創り、自分自身が心から生涯をかけて取り組みたいという考えが浮かぶようになりました。これらの考えの結果、ビールづくりによるまちづくりを進めています。

好きなことで地域に貢献する喜び —公務員ロックバンドで地域活性化—



橋本市総務部税務課主査

● 海堀 太郎

みなさま、はじめまして！ 橋本市総務部税務課の海堀太郎です。今回の「地域づくり」の特集は「プラスワンで地域をつくる若手公務員」がテーマ。ということで、この紙面をお借りして私もメンバーとして参加している、公務員で結成された音楽グループ、橋本市を中心に活動する「地域活性化ロックンロールバンド ザ★太郎さんズ」を結成するに至った経緯とそれに伴って気づいた「好きなことで地域に貢献する喜び」について書かせていただきます。その前に、まずは私の自己紹介から。

大震災機にIT企業から公務員へ

私が橋本市役所に入庁して10年目となりました。介護保険、市街地再開発、ふるさと納税、ブランド推進、シティセールスに携わり、現在は税務課で市民税を担当しています。もともと民間のIT企業でシステムエンジニア・プログラマーとしてアパレル企業のシステム開発に関わっていました。

たが、2011年3月11日に発生した東日本大震災をきっかけに公務員を目指すようになりました。東日本大震災で命を懸けて避難を呼びかけた女性をはじめ、全国から支援のために駆けつけている人々が公務員であるという報道を見て「いざという時に人々に寄り添えるのは公務員」と考え、翌年、勤めていたIT企業を退職し、地元の橋本市役所に転職しました。

日に日に強まる地域への思い

民間企業に勤めている時分には全く意識はできていなかったのですが、結婚して、子どもが生まれて、社会との接点が増えるにつれて行政の支えを肌で感じるようになりました。また、公務員に転職してからは地元のお祭りやイベント、自治会、PTAなどのコミュニティに積極的に参加するようになり、地域のために尽力されている人々と関わるにつれて「育ててもらった人々と地域に恩返ししたい、次の世代につなげなければ」

ここがスゴイ！

全力で取り組む強い意志

橋本市健康福祉部福祉課 中村 峻

海堀太郎君とバンドを結成して、はや8年目。私は共通の趣味で遊んでいるつもりでしたが、彼は最初から現在の活動を見込んでいたんだと、今になって思っています。

彼には先を見通す力があり、また遊びの中からでも、仕事に生かせるものを見出す力があります。これは「仕事」や「遊び」などの垣根を持たず、自身の興味に全力で取り組める強い意志によるものだと思います。

今後も彼は地域のためにその能力を生かしていってくれると思います。同僚として、また良きライバルとして期待しています。

全国で（たぶん）唯一の 公務員ロックバンド

という地域への思いが日に日に強くなりました。

橋本市の公務員として地元の橋本市民のために働く、大好きな音楽を通じて地域に貢献したい、楽しく地域のことを知っていただきたい、そうした思いの一つの答えが、2013年、地域活性化をコンセプトに橋本市役所の公務員で結成した「地域活性化ロックンロールバンド」です。

まずは地域をテーマにした楽曲の制作にとりかかりました。私達が勤める橋本市は世界遺産である高野山の隣町。もともと宿場町であり交通の要



公務員ロックバンドのメンバー全員



満員の聴衆を前に屋内ライブ

所という歴史があるのですが、現在ではどちらかというと通り過ぎられがち。そんな背伸びしない等身大の状況を歌った「おーい橋本」をはじめとしたさまざまな楽曲を、職場の同僚でありバンドメンバー、そして私のズッ友（ずつと友達）でもある中村峻さんが作ってくれました。

それらを引っさげ、地域のさまざまな場所でライブを行いました。ライブハウス、駅前、歩行者天国、公民館、古民家などなど。ライブをするとその地域に住む方々に声をかけていただけるのですが、公務員として庁舎で働いていたら出会えないような方々や課題に向き合う機会に恵まれ、バンド活動で得た経験が仕事にも生きてくるように

なり、ふるさと納税の返礼品の発掘やPR動画の制作につながりました。この部分についてはもっと書きたいのですが、それよりも今回はみなさまに伝えたいことがあるのです。

◆◆◆ 地域活性化とは

みなさまは「地域活性化」という言葉をどのように捉えていますか？ 私は公務員になってからずっとこの言葉の意味を考えています。どのような状態になれば地域活性化はゴールと言えるのか。まちの豊かさの指標としてしばしば挙げられる、たとえば人口、所得、経済的効果。それらがたくさんあれば豊かなのか、幸せなのか、それらが少ないま

ちは不幸せなのか。もちろん答えは地域の数だけあるのですが、地域でバンド活動が続ける中で、地域のことを歌うにつれて、地域に住む方々と触れ合うにつれて、その輪郭が徐々に見えてきたように感じました。

◆◆◆ 地域活性化に「ゴール」はない

一見、豊かさが実ったように感じる現代社会なのですが、人々が生きていく以上、それに伴う課題は果てまでついてきます。「どのような状態になれば地域活性化はゴールなのか」と前段で書いたのですが、地域に寄り添いながらバンド活動を続けていく中で感じたことは、「ゴールに向かう以外の答えがあるのかも」ということでした。人々の有機的な集まりである地域は、人々以上に関係性と物語を積み重ね、長い年月を生きてきました。これからも地域は遠い未来まで生き続けます。その地域に対して私達ができることは、常に課題と向き合い、次の世代にバトンタッチすることなのです。長い時間が必要となります。だからこそ、自分の好きなことと共に向き合うのです。自分のやりたいこと、自分の好きなこと、周りから求められていることの交わる場所に、きっと素敵な体験と仲間が待っています。

◆◆◆ やっちゃいましょう、好きなこと

私の場合はたまたま音楽が好きだっただけで、何でもいいと思います。公務以外ですのですから、好きなことやっちゃいましょう。好きなことに夢中になっているとき。そのときの自分が一番自然体ではないでしょうか。自然体で過ごす日常のふとした瞬間に感じるワクワク、これが地域活性化につながるかもしれないなんて最高じゃないですか。

島根を「世界の未来」つくる震源地に — 人生の目的のための手段として何をするのか —



島根県庁人事課 ● 中西 咲貴

入庁1カ月からの立ち上げラッシュ

「プライベートでYouTubeの発信活動をして
もいいですか？」

去年、島根県庁に入庁して1カ月もたっていないときに課長に直談判しに行ったのが懐かしい今日この頃。意気込んで行ったものの笑顔であっさりOKを出され拍子抜けしたことを覚えています。幸先良いスタートを切り、ここから私は自由奔放にさまざまなことを始動させていきました。

6月にYouTubeでの発信を始め、8月に「山王寺開拓人」と称して棚田の耕作放棄地を開拓する活動を仲間たちと始めました。10月には友人と「大学生スタートアップゼミ」という大学生がプロジェクトを考え実行するのをサポートする事業を立ち上げ、11月からはオンライン市役所という全国の熱い公務員が集まるオンラインコミュニティの庁内放送パーソナリティを務めました。1月には大学時代の先輩と英語コミュニティの運営を

始めました。また、同月に『月刊ガバナンス』に寄稿し初めての執筆活動を経験。その後、4月からの連載が決まりました。7月には大学でゲスト講師として90分の授業をする経験をさせていただきました。

このように勢いよく多くのことをスタートさせた私は、これらの行動を起こしたことで二つの気づきを得ました。

活動において大切な2つのこと

1つは、物事を始めるより、辞めどきを見極める方が難しいということです。さまざまなことを一気に始めると当たり前ですが、色んなことが中途半端になってしまう私にとって何かを新たに始めるというのは全くハードルがなく、むしろ、辞めどきを見極める方が難しいことを知りました。自分の時間は限られているにもかかわらず、確保できる時間の有無を考えずに物事を始め、自分で自分の首を絞めてしまっています。また、入

彼女が面白いと思う先に『未来』がある

島根県 隠岐支庁県土整備局用地課 長崎 愛璃

彼女がわくわくしながら見つめる先には、いつも素敵なものがあります。

面白いローカルプレイヤーの方や、魅力的な地域コミュニティ。

その瞳が輝く瞬間、私たちは「はっ」となるのです。

地域とは宝探しのようで、きらめく原石は、きっともう既にその地にあります。

あとは、私たちがその光を見つけられるかどうか。

彼女の瞳が輝くとき、私たちもわくわくします。

なぜなら、そこには未来へと輝きを放つ、素敵なヒントがあるからです。

ここがスゴイ！

庁1年目では仕事の繁閑の時期をよく分かっておらず、繁忙期の冬には全く手をつけられなかったプロジェクトもありました。ただ、やりたいことが次から次へと湧き出てくるのは悪いことではないので、「やめる・続ける・始める」を決断していく必要性を感じています。優先順位をつけ、新しく始めることの代わりにやめることを決断する、そのサイクルが大切だと失敗から学んでいるところです。

もう1つはご縁によって活動の幅が広がっていくということです。私がこのようにやりたいこと



山王寺の棚田で放棄地を開拓



大学生スタートアップゼミの大学生とメンター



全国の公務員が集まる「オンライン市役所」の庁内パーソナリティを務める

性を見据えた思考・行動をしています。しかし、自分自身に関しては、これからどのようなキャリアを歩んでいきたいかなど、将来のプラン設計はしていません。自分について1年後、いや、3カ月後ですらどうなっているか想像ができない中でプランを立てるより、「今」を一生懸命生きるということを大事にしています。過去も未来も「今」の積み重ねでしかないと思っています。奇跡的にこの世に生まれ、あとは死ぬだけです。その間で「今」を楽しみながら生きていきたいです。そして、より広く社会貢献できるような人間になっ

何のために生きているのか

失敗しては考え実行を繰り返している毎日です

が実現できているのは、各分野・業界・地域のキーパーソンにつなげてくださる方がいるからです。ご縁がご縁を呼んで今に至っています。何かプロジェクトを進めるとき、自分1人の力のみでは困難を極めます。心強い応援、一緒に進む仲間がいてこそ活動だということをとっても感じています。私と会って話してくださる方のおかげで活動ができ、自分という人間の可能性をも広げていただいています。何もない、何者でもない私に自身の信用を貸してその方にとって大事な人に会わせてくださるご縁のありがたさ、そういうとても大切なことに気づくことができました。

が、そもそもなぜ私はこんなにも多くのことをやるうとするのでしょうか。私には人生の目的がありません。「志高く、さまざまな価値観に寛容であり、大切な人を守る。また、同じ志の人たちに囲まれながら、有限な時間の中で少しでもはやく成長し、自分という人間の価値を高める。そして、より広く社会貢献できる人になる」この目的に少しでもはやく近づくために自分の時間をどう使うか考え、毎日を大事に生きています。この人生の目的はアップデートされていくもので、あくまでも「今の私」の目的ですが、ベクトルが大きく変化することはないでしょう。また、現在の私が思う社会貢献とは、自分の半径5m以内の人（自分に関わりのある人、親しみのある人）の困りごとで自分が力になれることをすることです。この半径5mを自分の実力に見合った範囲に大きく広げ

「今、この瞬間」を楽しむ

兵庫県出身の私が島根県にひかれてやって来て、さまざまな出会いを経て多様な活動をさせていただいている、そんな偶然の連続の先に私は何を見ているのでしょうか。

「島根から世界に」をモットーに島根を世界の未来の震源地にしたい、そういう想いを持っています。「自分がどのような状態なら、ある日突然死んでも後悔が少ないか」考えるといつも、世界というフィールドでワクワク挑戦し続けている姿が思い浮かびます。常に世界を舞台にできる可能性

ていきたいです。そのために、自分という人間の価値、つまり、私が存在することで救われる人がいるという価値を高めていきたいです。

1人の100歩、100人の1歩 ―越境して挑む防災とまちづくり―



高知市人事課主査
まんまる高知共同代表

・山本 美咲

防災の仕事通じ住民の姿に感銘

私は生まれ育った高知が好きです。学生時代に一度東京に出ましたが、地元で貢献する仕事がしたいと思い、高知市にUターン就職しました。そして、最初に就いた仕事が「防災」の仕事でした。東日本大震災から2年目の春、津波を想定した防災対策が全国で進む中、南海トラフ地震の被害が懸念される高知も待ったなしの地域です。

防災の仕事を通じて、住民の方々と避難先を協議し、訓練や勉強会を行う中で、地域で積極的に防災活動に取り組む住民の方々に感銘を受けました。一人で30万人の市民を啓発できなくても、彼らと協働することでより多くの方々に伝えることができるのではないかと希望を感じたことを覚えています。

同時に、もっと取り組みを広めていきたいという思いが強くなり、ライフワークとして防災活動に取り組むようになりました。平日の夜や土日を

使い、地域の方や福祉施設の方々と訓練やワークショップを行いながら、災害に強く強いまちづくりに向けて奔走していました。

地域課題への1アクションを目指す

このような活動の過程で出会った同世代と話していると、高知をよくしたいという思いを抱えているものの、きっかけがなくて行動に移せていない若者が、意外とたくさんいることに気がきました。それならば、きっかけとなる「場」を作ろうと思い、共感してくれた仲間と一緒に立ち上げたのが「まんまる高知」です。

まんまる高知は、課題先進県高知において地域課題に関心があるミレニアル世代（2000年以降に成人した世代、筆者と同世代）が集まり、課題に対して1アクションを起こすことを目標に活動しているコミュニティです。災害という課題以外にも、「若い人たちに高知で働くことの魅力を伝えたい」「子育てをしやすい環境をつくりたい」

ここがスゴイ！

アツいパワーと行動力で 周りを巻き込む！

「まんまる高知」共同代表 楠瀬 まどか

美咲さんは「真っ直ぐアツい人」です。彼女の思いの強さと行動力には、心動かされるものがあり、「美咲さんについて行きたい！」そう思わせる、不思議なパワーを持った方です。私自信、美咲さんとなら、何か面白いことができるかもしれない！ そんな思いで、一緒に活動を始めました。

課題が多く、簡単には答えが見つからないのが、地方創生。そんな困難さえも吹き飛ばしてしまう美咲パワーをこれからも発揮し続けてほしいです！

「土佐酒の魅力を広めたい」など、さまざまな課題意識や思いを持ったメンバーが集まり、それぞれ関心があるプロジェクトに参画しています。

私は、同世代に防災意識を持ってもらいたいという思いから、防災に関心があり約20人の同世代を誘い、台風で被災した地域で災害ボランティア活動をしました。被災された方のお役に立つのはもちろんですが、加えて、参加者が被災した地域を自分の目で見ることで災害を「ジブンゴト」に感じてもらうことが目的です。

参加者からは、「高知でも同じことが起こったら……と初めて考えた」「自分の職場や家庭でも準備をしておくべきだと感じた」などの声を聞く



まんまる高知の活動

ことができました。

このように、まんまる高知では、各人が地域課題と感ずることに対して、1歩踏み出してアクションすることを大切に活動しています。

◆◆◆

価値観を揺さぶられる

こうしてまんまる高知の活動を始めて少し経った頃、人事異動で経済産業省への派遣を命じられました。高知から一時的に離れることとなり、現場で活動ができなくなるこの不安を感じながら



同世代を誘い災害ボランティア活動（2列目中央が筆者）

ら、東京での生活がスタートしました。

しかし、いざ仕事を始めてみると、色々な方からさまざまな刺激をいただき、価値観を大きく揺さぶられるとともに、自分が井の中の蛙であったことを痛感しました。経済産業行政に関わる中で、「防災」から初めて視点を変えて、別の角度から社会を見つめてみたのかもしれない。防災啓発をするために、一生懸命「避難」だけ呼びかけても響く人はほんの一部でした。さまざまな角度からのアプローチや、各分野の強みを持つ人との連携によって、「まちづくり」に取り組む必要が

あったのだと気付きました。

越境するぜよ

◆◆◆

防災の仕事を始めた当初感じたように、自分だけでできることは限られています。1人の100歩も大事ですが、100人が1歩ずつ踏み出すことも大事。自分ひとりの活動に閉じず、どうやって周囲に波及させていくのか、どうやってさまざまな人を巻き込んでいくのかが大事であり、まんまる高知の活動を通じてうっすら感じていた、所属や立場を越えた「越境」がキーワードではないかと考えるようになりました。

高知には、地域を良くしたい人がまだまだたくさん潜んでいるのではないかと思います。所属や立場を越えて力を合わせれば、もっと可能性が広がるのではないのでしょうか。

私は、もう間もなく派遣期間を終えて高知に戻ります。東京で出会った人の中には、地方都市から来ている方もたくさんいました。地域特性はあるかもしれませんが、どこの地域も似たような課題を感じていると思いました。高知で挑戦する課題は、他の地方都市にも活かせる、他の都市の課題もまた、高知に活かせる、今ではそのように思っています。

高知に戻ったら、地域の中で越境するだけではなく、東京で出来たネットワークを活かしながら、地域すらも越境して地方都市を元気にして行けたらいいなと思います。

そのためにも、まずは地元が抱える課題にもう一度しっかりと向き合ってみたいです。

地域に飛び出した私が選んだ 転職先は再び公務員だった —対話、人とのつながり大切に—



大刀洗町地域振興課
企画係主査

・半田 遥

私は今年の4月に、人口約1万5000人、職員数が93人の町役場に転職しました。働く上での自分の軸は何か、自分をいかせる場所はどこか、を自分自身に問い続けた結果、8年間働いた福岡県庁を辞める決意をしました。自分自身の人生をもっと主体的に選んでいこうと思ったためです。そのキッカケは、仕事以外での活動やつながりでした。

生涯学習NPOのスタッフに

2013年に福岡県庁に農業職として入庁した同年の11月、NPO法人福岡テンジン大学のボランティアスタッフを始めました。同NPOは、「まちに住んでいる誰もが生徒にも先生にもなれる、キャンパスのない大学」として生涯学習の場を提供する団体です。当時、時間的にも精神的にも余裕があり新しいことに挑戦したい、仕事では学べないこ

とを学びたいという理由で関わり始めました。

毎月第4土曜日にスタッフが企画する「授業」を開催します。内容は、まち歩きをしながら福岡の歴史を学ぶ授業、これからの時代の生き方を考える授業、アートについて語る授業など、多種多様です。参加者も、中学生、高校生から60代まで幅広い世代の人が参加します。私は、「野菜の流通の仕組みを知ってほしい」という思いで卸売市場のセリを見に行く授業の企画や、「まちで暮らすとはどういうことかをみんなと考えたい」と思い、住むと暮らすの違いを考える授業などを企画しました。この活動を通して、属性の違う人たちと出会う楽しさを知った私は、仕事をしながら同NPO以外にもいくつかの活動に関わるようになりました。

地域での活動を続けて得たもの

私が得たものは、大きく二つあります。一つ目は、「対話し、学び合う」ことの面白さを知ったことです。2019年に大学生が宗教や経済、国家や芸術などのリベラルアーツを学ぶプロジェクトの運営を社会人メンターとして手伝いました。約30人の大学生が1年間、「答えのない問い」に対して自分の見解をもち、仲間と対話しながら学びを深めていきます。私自身、大学生と共に学び、対話する時間は、一人で学ぶよりも何倍もの価値がありました。

当時、出先機関で普及指導員としてトマト生産

ここがスゴイ！

持ちまへの好奇心、
そして「おしゃべり」を武器に飛び込む！

大刀洗町地域振興課長 村田 まみ

半田遥さんは、県庁に勤めている時からの知り合いでした。いつも好奇心旺盛。そして「おしゃべり（対話）」が上手という印象でした。彼女が県庁から転職して私たちの仲間に入り、起こしているイノベーション。それは前職や職場以外の社会（NPO活動など仕事外の活動）で得た人脈や知識、見解を十分に職場で生かしていることです。仕事でも積極的に町へ出て町民と交流し、職場の中に良い風を吹き込んでいます。外の風が入ることで、種が飛んできて新しい芽が出ています。まさに「プラスワンで地域をつくる公務員」そのものですね！



大学生とリベラルアーツを学ぶプロジェクトで



トマト生産者との勉強会の様子



町民の方々と公共交通について話し合う

者に技術指導を行っていた私は、双方向の学びの場を仕事にも取り入れたいと考え、有志生産者を募り勉強会を始めました。生産者に技術を伝える時は一方通行になりがちですが、学び合える関係性が築けている地域は強い、という考えのもと、10人程度の生産者と共に月2回、1年間勉強会を続けました。その結果、同年のその地域での収穫量トップは、勉強会に参加した生産者でした。私が得たものの二つ目は、健全な依存先を複数持つことができたことです。仕事に悩んだ時、人生の進み方に悩んだ時、その時々に応じて相談できる人が複数人いたことで今の私がいます。

公務員だからできることがある

さまざまな活動に関わるにつれ、「私の軸は何

か」を考えるようになりました。このまま農業職として農業に軸を置くのか、それとも別の軸を見つけるのか。出先機関での仕事は、頑張った分だけ生産者の方に喜んでもらえることが多くとても楽しかったです。しかし、自分の道をしっかりと歩んでいる人に出会うたび、このままでいいのかと悩みました。休日に会う人は公務員以外の人が多かったこともあり、フリーランスや民間企業で働いている人に憧れる時もありました。しかし、2018年から全国の公務員が集う「よんなな会」や「市役所をハックする」などに参加し始め、公務員という立場で挑戦している人たちが多くいることを知りました。また、公務員だからこそ出来ることがあるということも知りました。同一のコミュニティに所属し続けると視野が狭くなってしまうと考え、外にばかり目を向けていた私。しか

し、自分の立場である公務員という仕事にしっかりと目を向けていなかったことに気づきました。改めて自分の今後を考えた時、興味のある「対話」や「学び合う関係」「地域づくり」などのキーワードから次のステップとして選んだ舞台が人口約1万5000人の町役場です。大刀洗町は、対話や人と人のつながりを大切にしながらまちづくりを進めています。これまで取り組んできたことを仕事でより活かしたいと考え、転職を決めました。

もう一步、地域へ踏み込む

4月から、公共交通や空き家対策の仕事をしています。公共交通については、町民の方々と新しい手段が必要か、必要ならばどのような形が良いか、を話し合いながら進めています。自分たちのまちは自分たちでつくる。そんな雰囲気は町民の方から感じられる大刀洗町での仕事はやりがいがあります。

仕事とプライベートのバランスを悩みながら走り続けてきた8年間。多くの学びを地域の活動から学んだからこそ、もう一步地域に踏み込んだ場所でも挑戦しようと決めました。対話しながら自分たちのまちをつくることのできる地域がこれから先、魅力的なまちとなっていく。そう思いながら、自分ができることを一つずつ行い、新しい場所で頑張ります。

プラスワンで地域をつくる
若手公務員

地域づくりは楽しい ―「やりたい」を大切に―

山形市副市長 ● 井上 貴至

どんな分野でも「やりたい」ことは、「やらされている」ことと比べて、大きな力を発揮します。「やりたい」ことだからこそ、没頭して長く続けることができます。そして、「やりたい」という強い気持ちが仲間を動かします。

読者の皆様にとって「やりたい」ことは何でしょうか？

私が高校から続ける柔道では、「やりたい」かどうかを見極める簡単な方法があります。投げられたときに「悔しい」と思うか、「もう、いいか」と思うかの違いです。最初は誰もが初心者ですから必ず投げられますが、その時に「悔しい」「次は投げたい」と思うからこそ技を磨き、体を鍛えることができます。「もう、いいか」と思う人には、成長はありません。

柔道では、毎年4月28日に東京の講道館で高段者大会が開催され、全国から猛者が集います。60歳、70歳は珍しくなく、80歳を過ぎた方も参加されます。数年前ですが、80歳を過ぎた方が試合に

負けた後、「悔しい」といつて、仰向けになって天井を見ながら泣いている姿を見て、感動したことがあります。

「やりたい」「悔しい」という気持ちに年齢は一切関係ありません。ぜひ皆様もどんな分野でも「やりたい」を見つけて、貫いてほしいです。

そして、「やりたい」ことが仕事にかかわることならば、これほどありがたいことはないと思います。ともすれば家族や友人と過ごす時間よりも長く仕事にかかわるわけですから。

一方で、「やりたくない」ことは、無理をしなければならないありません。無理をしても、つらいばかりか、成果も出ません。世界には多種多様な仕事や遊び、暮らし方があるわけですから、限られた人生の時間を、自分に合った「やりたい」ことに注力する方が有意義です。

地方公務員の皆様には、「地域を良くしたい」という強い気持ちを持つてほしいです。

筆者プロフィール

井上 貴至氏
(いのうえ・たかし)

1985年大阪生まれ。2008年総務省入省。15年4月から自ら提案した地方創生人材支援制度の1号で鹿児島県長島町に赴任。7月から副町長（29歳は史上最年少）。17年4月からは愛媛県市町振興課長。内閣府地方創生推進事務局を経て21年7月から現職。週末は地域の隠れたヒーローを訪ね歩く。座右の銘は「ミツバチが花粉を運ぶように全国の人をつなげたい」。共著に「ソーシャルパワーの時代」（産学社）。

「やりたくないこと」でなければ 何でもやってみる

ところで、「やりたい」ことだけやることと、「やりたくない」ことでは何でなければ何でもやってみる、というのは全然違います。生まれたときから「やりたい」ことが明確な人はいないでしょうし、何でもやってみる中で本当に「やりたい」ことが明確になってきます。地方公務員の仕事は、相当に幅広く、どの仕事も地方自治体として欠かさない業務なので、職員の希望をすべてかなえることはおよそ不可能であり、「やりたい」仕事とは異なる分野に配属されることも珍しくありません。しかし、「やりたくない」ことでなければ何でも



古賀稔彦先生サイン

やってみることで、気づきや学びが得られ、新たな「やりたい」と出会うことができます。

「やりたくない」ことについては、目線を変え、ことも有効です。上司から「やらされている」ことの中にも、少しは自分が「やりたい」ことを入れてみると良いかもしれません。住めば都、人間至る処青山有りです。

現場を旅する

私にとって、地域づくりは一番「やりたい」ことです。人とお会いして、町に出るのが大好きです。総務省入省以来、新型コロナウイルス感染症が流行するまでは、毎週末私費で全国を旅して、出会った人と事例をつなげ新しい花を咲かせる「地域のミツバチ」活動を続けてきました。

そのきっかけは、大学2年生の時に、たまたまクラスメイトから誘われたゼミです。最初の授業

で、「君ら東大生は何も知らない。とにかく現場に行きなさい」と言われたことが今も鮮明に記憶に残っています。仲間たちと、沖縄の防空壕や米軍基地、あるいはアジアの研修生を受け入れた農場などで、それぞれの専門家からお話を伺ったことがとても楽しかったです。

社会人になった今も、ゼミの仲間たちとはさまざまなプロジェクトを進めています。

旅は、特別です。他の多くのものは、お金をかければかけるほど時間が短くなりますが、旅はお金をかければかけるほど時間が長くなります。普段はなかなか一緒に話せない人ともゆっくり話すことができます。

最近では、スタディツアーやボランティアツアーなどもありますので、まず一度参加してみたらどうでしょうか。

このようなツアーの参加者には、さまざまな地域のイベントや社会問題に感度が高い人もいます。とでしょう。そうした人に誘われたら、「やりたくない」ことでなければ何でもやってみる、の精神で一度飛び込んでみましょう。案ずるより産むが易しです。きっと世界が広がると思います。

一対二で向き合う

一方で、深く学ぶためには、一対二で向き合うことも大切です。私自身振り返って良かったのは、本を読んで、あるいは講演を聞いて面白かった人や、仲間から紹介された方に、一人で、週末に私費で、訪ねたことです。

一人で向き合うためには、予習が欠かせません。

お会いする方が、何を大切にしているのか、なぜこのようなことをされるのか、常に考えて臨むようにしています。また、週末に私費で伺うことは、相手に本気度が伝わります。地域で活躍する人はそのホームグラウンドでこそ輝く。現場でじっくりとお話を伺い、関係性を構築することができます。

他者に伝える

予習とともに、復習も大切です。最も良い復習は、他者に伝えることです。伝えることで自分自身の理解度が高まるとともに、仲間を集めることができます。私の場合は、実名で、ブログ「地域づくりは楽しい」を10年以上書いています。

かつて、経済産業省の職員が、「高齢者は早く死ぬ」と書いて炎上、停職処分になった事例もあるので、若手公務員が実名でブログを書くことはリスクではないか、と言われることもあります。

しかし、実名か匿名かの区分に関わらず、社会人として、反社会的・反道徳的なことや、職務上知り得た秘密について発信してはいけないことは当然のことであり、逆にそれを守っていれば、そういうリスクを過度に恐れる必要はないと考えています。むしろ、実名でブログを続けることは、リスクをはるかに上回るメリットがあります。

○分析する、考えをまとめる

視察して、「ああよかったな」では、すぐに忘れてしまいます。徳島県神山町は、サテライトオフィスがあるから良かった、というレベルでは、ほとんど何の意味もありません。何が良かったのか、

なぜできたのか、どういう過程だったのか……自分なりに掘り下げて考えることが不可欠です。

○分かりやすく伝える

考えをまとめるだけなら、「日記」でもいいかもしれませんが。でも、筋道や順番、キーワードなどを考えて他者に分かりやすく伝えようとすることで、より考えが深まり、整理されます。

○名刺代わりになる

分かりやすく伝えるだけならば、「TwitterやFacebookでも代用可能かもしれません。」

しかし、フローとして流れる「TwitterやFacebookよりも、ストックとしてのブログには

	身につく旅	身につかない旅
費用	私費	公費
人数	1人又は少人数	大人数
予習・復習	徹底	しない
行先	自分で決める	人任せ

身に付く旅、身に付かない旅

大きな効果があります。積み重ねれば、自分の名刺の代わりになり、信用が生まれます。

○新しい情報や仲間が得られる
情報を発信して、活動内容を理解してくださる人が増えてくると、さまざまな方が声をかけてくれます。私の場合、ブログ

を続けることにより、地域づくりの分野以外の方々も、井上は地域に詳しいというイメージを持つてくださり、ベンチャー企業の地域における実装などさまざまな相談をいただくようになりました。新しい情報や仲間が得られるということは個人が実名でブログを続ける一番のメリットではないでしょうか。

○人と人をつなぐ

ブログで紹介した人や事例に触発されて新たな動きが始まり、あるいはブログで紹介した人と一緒に何かやろうという動きが広がっています。

皆様も自分の言葉で伝えるということに挑戦してみたいかがでしょうか。ブログが難しいという場合は、まずは、周りに口頭で伝えるということも一つの方法です。

地元の関係構築

地方公務員の最大の武器は、地元で詳しいということ。どんな分野でも地元の方々との関係構築がカギとなります。では、どうすれば地元と関係が構築できるでしょうか。四つの自治体に赴任した経験などを踏まえてお伝えしようと思います。

最初の3カ月から半年は、誰よりも地域のさまざまな会合や祭り、イベントに出席しました。会合の中で面白いと思った人のところには、翌朝出向きます。そうすると、関係性がぐんと近くなり



地域力おっは-クラブ テーマソング

あのまち このまち
手と手をつないだら ほら
おっはー おっはー
笑顔あふれだす
あなたのまちをお手伝い
地域力おっは-クラブ
おっはー



地域力おっは-クラブテーマソング

ます。

遠い方の場合には絵葉書を書きます。SNS全盛の時代だからこそ印象に残ります。

相手が大切にしていることを、大切にすることも重要です。掃除を大切にしている会社で、社員の皆様と一緒に掃除をしたのも良き思い出です。相手と対話する際には、相手の話を引き出し、できる限り聞くよう心掛けています。

何か頼まれたときは、チャンスです。頼まれごとには、全力で応えます。担当外でも知りませんと無愛想に答えるのではなく、一緒に考え、詳しい人につなぐことで、信頼関係が生まれます。

すぐに反応することも大切です。政策や事業では検討に時間がかかり、どうしてもすぐにアウトプットとして示せないこともあります。途中経過を報告し、あるいは、ブログやSNSなどで良いところを発信することはすぐにできます。出入口、出し入れ、出入りなどのように、何事も出すことから始まります。



芭蕉ゆかりの立石寺（山寺）を訪れた筆者

自分自身でイベントを企画することも有効です。私は東京で、朝の異業種交流会「地域力おっはークラブ」を10年間主宰してきました。キーワードは、「気軽に、楽しく、中身濃く」です。真面目なことを真面目にするだけでは広がりません。アカペラユニットXU XUさんにテーマソングを作ってもらってみんなで歌ったり、紙芝居で案内したり、パンとコーヒーを用意するなど多様な動きや役割を加えることで、参加者も多様化します。内閣府の食堂のおばちゃんも「この勉強会は楽しい！」と毎回来てくれますが、プロとは違う視点で気づきを与えてくれます。

鹿児島県長島町の時は、よく地域を元気にするバーベキューを開催しました。異業種交流会と言っても地元の農家や漁師の方々は来てくれません。食材だけでなく、できること・やりたいことを持ち込むことで、新しい事業が次から次に生まれました。仲間づくりでは、場に働きかけることが重要です。バーベキューは参加者みんなの気持ちの前向きになりますし、みんなに役割がある最適なツールです。

頼みごと、おわびごとは出向くのが基本ですが、用があるときに行くのは当たり前で、用がないときもふらっと立ち寄ることも有効です。そうすると、忙しくて出向けないときは、かえって先方が気遣ってくれるようになります。

複層的關係を持つのも良かったです。仕事だけではなく、趣味として、お客さんとしてかわることで關係性が深まります。

信賴關係が生まれてくると、今度はこちらから頼んでみましょう。良い人脈とかけて、良いスツと解きます。その心は、使わなければ傷むし、使いすぎて傷む。どんな案件でも、いつも同じ人をお願いするのはその人も疲れてしまいますが、たまにお願いする分にはかえって信賴關係が深まります。相手が「やりたい」ことをお願いすると、成功しやすいです。その際、地域の目立つ人は既にさまざまな役割を持っています。子育てを終えて落ち着いたパパ・ママや、実績はないがやる気はある若者などを発掘できるとな良いです。直接会うことにはどうしても時間的限界があり、マスメディアをうまく活用することが重要です。

ヒットをたくさん打つためには、一つだけ真理があります。とにかく打席に立つことです。記事の掲載も同じで、長島町副町長の時は、毎週必ずプレスリリースを出すよう心掛けていました。プレスリリースのコツは、新しいこと、数字で示せること、プレスリリースを読むだけで記事が書けることの3点です。

記者との關係構築においても、前述した場に働かせることや複層的關係が有効です。例えば、東京から来た記者ならば、副町長室で話した後、

漁船をチャーターして夕日が輝く海を走って、離島のイベントと一緒に参加したこともありました。地元の記者ならば、長島町とは關係がない記事でもその記者の署名入りの記事があると、お客さんとして、あの記事面白かったですね、と声をかけます。

直接伝えるより、間接的に伝わることの方がより響く場合があります。グー、チョキ、パーの三角形の關係です。グーは、パーに負けますが、チョキを介すると勝つことができます。マスメディアを介するのも一つの方法です。

やりたいを貫く

今でこそ地方創生の第一人者として捉えられるようになりましたが、決して順風満帆ではありませんでした。今振り返れば恥ずかしいこともたくさんあります。現場にこだわるあまり、制度官庁の主流を歩まなかったように思います。

それでも「やりたい」「地域を良くしたい」という気持ちを貫くことが大切です。最初から評価を追い求めると逃げていきますが、必ず見てくださる人がいます。続けていると、思わぬ追い風が吹くときもあります。

これから活動する方は、「小さな丘の頂上に旗を立てる」ことを意識するとうまくいきやすいです。小さくとも自分が「やりたい」分野の第一人者になるということです。どんな井戸も深く掘れば必ず水脈とつながります。

皆様の「やりたい」を大切に、それぞれの分野での御活躍を祈念しております。



宝くじ桜



一輪車



ドリームジャンボ
絵本



宝くじは、



図書館や動物園、学校や公園の整備をはじめ、少子高齢化対策や災害に強い街づくりまで、さまざまなかたちでみなさまの豊かな暮らしに役立っています。



救急普及啓発
広報車



遊具



移動採血車



青色回転灯
パトロール車



下水道啓発
パンフレット



自然公園案内
映像展示設備



一般財団法人日本宝くじ協会は、宝くじに関する調査研究や公益法人等が行う社会に貢献する事業への助成を行っています。



一般財団法人

日本宝くじ協会

<https://jla-takarakuji.or.jp/>